

# 人間の知と行為の根本秩序

—— その協働的・変容的特性 ——

チャールズ・グッドウィン\*  
北村隆憲(監訳)<sup>†</sup>  
須永将史<sup>‡</sup>  
城綾実<sup>§</sup>  
牧野遼作(訳)\*\*

## 目次

〈訳者解題〉

アブストラクト

1. 人間行為をつくり上げること
2. 基質に対して元の構造を維持しつつ変容を生じさせること
  - 2.1. 相互行為における秩序創出の資源としての公的基質
3. 人間行為の積層的組織
  - 3.1. 他者の発言と行為の脱積層化
4. 人間行為の積層化構造がもつ累積力
5. 協働変容域
6. 人間の道具使用
7. 協働的行為を通じた適切な知を有する行為者の形成
  - 7.1. 専門家としてのものの見方を調整すること
8. 結論

参考文献

---

\* GOODWIN, Charles University of California at Los Angeles

† KITAMURA, Takanori 東海大学 ken3282@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp

‡ SUNAGA, Masafumi 立教大学 snms0310@gmail.com

§ JOH, Ayami 京都大学 ayami.joh@gmail.com

\*\* MAKINO, Ryosaku 国立情報学研究所 ryosaku@nii.ac.jp

## 〈訳者解題〉

## チャールズ・グッドウィンと「協働的行為」の構造——訳者解題

近年、録音・録画機器の発達とともに、音声や映像データを使った人々の日常的な相互行為・コミュニケーション研究がますます盛んになっている。本論文の著者であるチャールズ・グッドウィン教授は現在、UCLAの応用言語学の教授であり（UCLA Department of Applied Linguistics 2017）、今日の音声・映像データの分析に依拠する相互行為・コミュニケーション研究の流れをつくりあげた当該分野の第一人者である。ここに翻訳した論文は、グッドウィンが90年代以降取り組んできた経験的研究プログラムからの知見の理論的総合ともいえる内容となっている。本論文は仏語にも翻訳され、グッドウィン特集が組まれた*Tracés*誌第16号（2016）に、他の執筆者によるグッドウィンの研究紹介などの諸論文とともに掲載された。加えて私信によればグッドウィンは、本論文の重要なキーワードでもある‘co-operative’（詳しくは後述）を冠した大部の著書[私信によれば、仮タイトルは「Co-Operative Action」(協働的行為)]を本年(2017)中に出版することを目指しているそうである。本翻訳が、グッドウィンの業績がより広く日本の読者に読まれるきっかけとなれば幸いである。

彼の研究関心は、談話、身体化(embodiment)、参与構造、ジェスチャー、状況に位置付けられた認知、会話、科学実践のエスノグラフィー、など幅広く、人類学、社会学、コミュニケーション理論などの諸領域において、活動理論、分散認知、ジェンダー理論、状況的行為といったさまざまな学術領域のトピックや理論に影響を与えている（Goodwin 1996）。一方で彼の研究手法は一貫して、日常的なフィールドや専門的・科学的フィールドにおいて相互行為そのものを録音・録画し、そこでなされるやりとりを直接観察することによって分析するというものである。この分析手法は、社会学者のゴフマンの研究やエスノメソドロジー(ethnomethodology)・会話分析(conversation analysis)から強い影響を受けたものである（そして、同時にグッドウィンの研究はエスノメソドロジー・会話分析に強い影響を与えている）。これらの研究の影響を知ることは、本論文に含まれる分析の理解の一助になると考え、以下グッドウィンと、ゴフマンの研究、

会話分析，そして相互行為における身体（のふるまい）研究とのかかわりについて記す。

1970年代にグッドウィンがペンシルバニア大学で大学院生だったころ，社会学者アーヴィン・ゴフマンは同大学で教授であり，大きな影響を受けたという（高田 2015: 234）。ゴフマンはまた，マジョリー・ハーネス（“キャンディ”）・グッドウィンというチャールズの公私にわたるパートナーの指導教員でもあった。ゴフマンは，類稀なる洞察力と叙述スタイルで，相互行為を構成する多数の諸概念を社会学研究の俎上に載せた。たとえば，ある集まりに対し行為者が自身の体や顔の向きを使ってどのように志向を示すかを参与フレーム（*participation framework*）といった概念で描き出した。グッドウィンは，個人およびキャンディとの共同研究を通じて，ゴフマンの見出した諸概念が実際に相互行為のなかでどのように扱われるかを，ビデオ録画したデータをもとに経験的に分析している。彼らの分析により洗練されたゴフマンの諸概念は，現在の社会言語学，社会学，会話分析研究などにおける重要なトピックになっている（高田 2015; 平本 2015）。

社会学におけるエスノメソドロジーのアプローチから派生した会話分析は，社会的行為のなかで行行為者たちが，どのようなやり方で組織だった形で秩序を生み出すのかを分析するものである（Psathas 1995）。会話分析は，社会的行為の秩序の根拠や原因を解明するものではなく，「ある相互行為の秩序が，相互行為の具体的進行のなかで，またその具体的進行をとおして，その時々の相互行為上の偶然的条件に依存しながら，いかに組織されているか」（西阪 1997: 35）を記述するものとされる。会話分析は，ハーヴィ・サックス（1972）による電話会話を対象とした分析から始まり，順番交替システムのメカニズム（Sacks et al. 1974）や行為の連鎖やコミュニケーション上のトラブルの修復プロセスなどの日常会話のメカニズム，そしてその後，さまざまな社会制度を構成する言語的相互行為の組織を分析するアプローチとして，広く知られるようになっていく。

グッドウィンは，会話分析の創始者であるサックスやエマニュエル・シェグロフ，ゲイル・ジェファーソンとも親交があった。グッドウィン夫妻とジェファーソンは，1970年代頭から，共に日常的場面における相互行為のビデオ分析を開始し，後にサックスやシェグロフも合流し，グッドウィン夫妻が収集し

たデータをもとにデータセッションをおこなっていたという (Sacks and Schegloff 2002). こうした交流が双方の研究を深めたことは容易に想像できる. グッドウィン夫妻と会話分析創始者らのデータセッションの初期の成果は, 1975年のアメリカ文化人類学会で発表され2002年に論文として公刊された (Sacks and Schegloff 2002). 他方, グッドウィン (夫妻) も会話分析の方法論を自身の研究において活用し, 発話の連鎖構造に視線やジェスチャーなどが結びついて, どのように相互行為の意味が(再)構成されるのかを明らかにしてきた.

会話分析や相互行為研究という領域においてグッドウィンは, 相互行為における人々の身体 (のふるまい) 研究の泰斗とされている. 上述のようにグッドウィンは研究の初期段階から, 録画された会話を対象に分析をおこなっていた. その際彼は一貫して, 言語使用とともに, 会話で観察される人々の身振り手振り, 手の位置, 視線など身体のふるまいを記述し, それらが言語と結びつくことによってコミュニケーションが達成されていく精細かつダイナミックな組織を分析の俎上にものせてきた (Goodwin 1981). そして, ビデオデータに依拠した相互行為における人々の発話とふるまいの経験的研究は, こうしたグッドウィンの研究に鼓舞されて, 内外でまことに大きな広がりを見せしており, グッドウィンらを中心とした論集も出版されている (Streeck, Goodwin and LeBaron 2011). 本論文は, こうした一連の研究と研究アプローチによる経験的分析から得られた知見を「人間の知と行為の根本原理」として理論的に総括したものといえる.

こうしたグッドウィンの研究が, 国内外に与えた影響について簡単に述べておく. 相互行為における身体のふるまいも含めた組織を検討する研究は近年マルチモダリティというキーワードで括られることもあり, 2010年に開催された国際会話分析学会主催の国際会議は, 開催テーマをマルチモダリティと銘打って開催された. この会議の内容をもとにして, 2013年にはJournal of Pragmatics誌にて, マルチモダリティを主題とした特集が組まれた. 本論文はその特集に掲載された諸論考のひとつである. 本特集号の序文には, グッドウィン同様会話分析研究およびエスノメソドロジカルなワークプレイス研究に大きな影響を与えているクリスチャン・ヒース (Christian Heath), そしてグッドウィンやヒースが道を開いたマルチモダリティに着目した研究をさらに拡大しているロレンザ・モンダダ (Lorenza Mondada), 会話分析からの知見を哲学におけ

る諸理論に結びつけようと多様な相互行為場面を研究しているユルゲン・ストリーク (Jürgen Streeck) などの著名な研究者が名を連ねられるなか、その筆頭にグッドウィンが据えられ、1970年代以降の彼のキャリアと業績が紹介されている (Depperman 2013)。

相互行為における身体ふるまいを対象とした、日本のエスノメソドロジーと会話分析の領域の主導的な研究者による諸研究にも、グッドウィンからの大きな影響が認められる (山崎・西阪編 1997; 西阪 2008)。会話分析以外の研究領域においても、たとえば、人間行動学 (細馬 2012) や文化人類学 (菅原 1996) などの領域でも、グッドウィンの諸研究が盛んに利用されている。

以上のように、グッドウィンの諸著作は国内外において、社会学、人間行動学、人類学、法学などさまざまな領域における、人間の相互行為やコミュニケーションの理解に対して重要な示唆を与えてきた。他方で、今日までグッドウィンの研究についての紹介は断片的なものが多く、彼の著作の邦訳もわずかひとつに過ぎない (Goodwin 1994=2010)。本翻訳はそれに続くものであり、国内の相互行為・コミュニケーション研究の発展の一助となれば幸いである。

最後に、本論文で重要なキーワードとなっている「協働的行為 (co-operative action)」の概念とその訳語について若干説明する。グッドウィンはハイフォンを付けた “co-operative” を、“cooperative” と使いわけている。日本語としては普通どちらも「共同的」とか「協力的」といった意味となるだろう。ダーウィン以来、生物がおこなう「cooperation (協力・共同)」行動は、自然人類学 (ないし、進化人類学) におけるもっとも重要なトピックのひとつである。進化人類学でその概念は、ある個体が何らかの犠牲を払って他の個体を利するための行動と理解されている。このような理解からは、個体は自己の生存の機会を低減させてまでなぜ自己の犠牲のもとに他者の利益を図るのかという「利他的行動」についての難問が生じてくる。グッドウィンの “co-operative” の概念は、こうした進化人類学上の「目的論的」な概念とは次のような意味で決定的に異なる。

グッドウィンが本稿の冒頭で扱っている短い会話によって考えてみよう。この短いやり取りには、グッドウィンが本稿で焦点を当てる、人間の協働的行為の特徴がきわめて明確に現れている。

- 1 トニー： お前、庭から出ていったらどうなんだよ。
- 2 チョッパー： お前、庭から俺を出ていかせたらどうなんだよ。

まず、1行目のトニーの発話は、異なる複数の語を組み合わせ、それぞれの語では表せない発言の意味を生み出している。そして、2行目のチョッパーの発話は、まったくゼロから自分の発話を生み出すのではなく、1行目のトニーの発話を分解し再利用して再構成する（「俺を」を挿入し、「いったら」を「いかせたら」に変えるなど）という系統的な「操作（operation）」を施すことで、まったく異なる新たな行為（発話）を産出している。換言すれば、チョッパーは、トニーの挑発的な要求行為（「庭から出ていったらどうなんだよ」）がもつ言語構造を自身の発話の基礎資源（「基質」）として利用しながら、それを変容させ別のあらたな行為である反駁的な言い返し（「庭から俺を出ていかせたらどうなんだよ」）を生み出しているのである。ここで、トニーもチョッパーも、自己に何らかの犠牲を払って他者の利益を促進するために活動（発話）をしているわけではないことに注目しよう。また彼らは、合意や同調を達成するために「協力」し合っているわけでもなく、むしろ積極的に強い敵対関係をつくりだしているのである。むしろ、ここでのチョッパーとトニーの発言が、結果として彼らに何らかの不利益を与えたり利益を増進したりすることもあるだろうが、グッドウィンの「co-operation」概念は、個体の利益や不利益を生じさせるという目的に対して、不可知論を貫くのである。さらに、この概念は、先行する行為や意味構造に対して、分解や再利用といった特定の「操作（operations）」を施すことの重要性を強調するものでもある（私信による）。こうした理由から、「co-operative」の語を初出では「共-操作的」と訳するとともに、その後は読みやすさを考慮して「協働的」と訳出した。

グッドウィンによれば、上記のような「言語構造」などの日常的な会話にも見出すことのできる資源だけが「基質」として利用されるわけではなく、考古学者などの専門的な集団が用いるマンセル・カラーチャートなどの科学的媒体などもまた同様である。先行する行為の基質に対し、その構造は維持したまま変容操作が加えられ、それが連なって累積（accumulation）していく。このような相互行為的プロセスが、グッドウィンが「co-operative」という概念によって

強調しようとした点なのである。グッドウィンとは本稿で、人間の文化・知の形成の原理をそのような累積的秩序として提示しているわけだが、この「理論」はあくまでも実際の人々の実践についてのビデオデータなどを利用した緻密な分析を通じてその構造とプロセスが解明されていることに注目してほしい。

訳出上の凡例。①原註は原文では後註だが、読みやすさを考慮して脚注の形式とした。②原文で斜体文字となっている用語は、見やすさを考慮して、斜体＋ボールドとした。③また、本稿の全体構成を一望できるように、冒頭に目次を付した。④文意を明確にするために訳者が補った語句・文は、[ ]で括っている。

本論文の日本語訳に際して、原著出版社より翻訳許諾を受けた。また、電子メールを通じて訳者の質問に答えて頂いたグッドウィン教授に記して感謝申し上げる。

## [参考文献]

- Goodwin, Charles, 1981, *Conversational Organization: Interaction Between Speakers and Hearers.*, New York: Academic Press.
- Goodwin, Charles, 1994, "Professional Vision," *American Anthropologist* 96(3): 606-633. (= 2010, 北村弥生・北村隆憲訳「プロフェッショナル・ヴィジョン——専門職に宿るものの方見方」『共立女子大学文芸学部紀要』56: 35 - 80.)
- , 2000, "Action and embodiment within situated human interaction," *Journal of Pragmatics*, 32: 1489-1522.
- and Goodwin, Marjorie, Harness, 1996, "Formulating Planes: Seeing as a Situated Activity," David Middleton and Yrjö Engeström, Yrjö eds., *Cognition and Communication at Work*, Cambridge: Cambridge University Press, 61-95.
- Deppermann, Arnulf, 2013, "Introduction," *Journal of Pragmatics*, 46: 1-7.
- 平本毅, 2015, 「会話分析の「トピック」としてのゴフマン社会学」中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン——やりとりの秩序の社会学』新曜社, 104-129.
- 細馬宏通, 2012, 「身体解釈法: グループホームのカンファレンスにおける介護者間のマルチモーダルな相互行為」『社会言語科学』15 (1) : 102 - 119.
- 西阪仰, 1997, 『相互行為分析という視点』金子書房.
- , 2008, 『分散する身体——エスノメソドロジー的相互行為分析の展開』勁草書房.
- Psathas, George, 1995, *Conversation Analysis; The Study of Talk-in-interaction*, London: Sage publications (=1998, 北澤裕・小松栄一訳『会話分析の手法』マルジェ社).
- Sacks, Harvey., Schegloff, Emanuel. A., 2002, "Home position," *Gesture* 2(2): 133-146.

- Sacks, Harvey, 1972, "An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology," David Sadnow ed., *Studies in Social Interaction*, New York: Free Press, 31-73. (=1995, 北澤裕・西阪仰訳「会話データの利用法——会話分析事始め」『日常性の解剖学——知と会話』マルジュ社, 93-173.)
- Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel, A., and Jefferson, Gail, 1974, "A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation," *Language*, 50: 696-735. (=2010, 西阪仰訳「会話のための順番交替の組織——最も単純な体系的記述」『会話分析基本論集』世界思想社, 7-153.)
- Streeck, Jürgen, Goodwin, Charles, and LeBaron, Curtis eds., 2011, *Embodied Interaction: Language and Body in the Material World*, New York: Cambridge University Press.
- 菅原和孝, 1996, 「コミュニケーションとしての身体」菅原和孝・野村雅一編『第2巻 コミュニケーションとしての身体』大修館書店, 8-38.
- 高田明, 2015, 「ゴフマンのクラフトワーク——その言語人類学における遺産」中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン——やりとりの秩序の社会学』新曜社, 229-255.
- UCLA Department of Applied Linguistics, 2017, "PEOPLE CHARLES GOODWIN," (Retrieved January 9, 2017, <http://www.appling.ucla.edu/people/faculty/2-uncategorised/40-charles-goodwin>).
- 山崎敬一・西阪仰編, 1997, 『語る身体・見る身体』ハーベスト社.



## アブストラクト

本稿は、人間行為の構成にとって中心的な重要性を有する一連の特徴に焦点を当てつつ、人間の社会性がいかにして確立し維持されるのかを理解しようとする研究分野へ向けて、経験的データに依拠した理論的な貢献をなそうとするものである。人間の行為は、高度に、そしておそらくは固有の意味において、単一操作的なものである。個々の行為は、言語構造、音調、可視的な身体表示を含むさまざまな異なる素材をまとめ上げることによって構成される。地層図といった記号論的な意味を与えられた対象物は、それが局所的な行為のなかに置かれると、先行行為者たちから譲り受けた世界を理解しその世界へ働きかけるやり方を含意することになる。さまざまな素材から組み立てられたこのような公的に利用可能な統合態に対して、新たな行為は、系統的で選択的な操作をなすことによって形作られるのである。このように単一の行為に多様な素材が包摂されることにより、次のふたつのことが可能となる。つまり、1) 次々と連鎖上に位置付けられていく行為者たちが、それぞれ異なる構造を提供し合うことによって単一の共同行為の産出に寄与する場合に、協働的な社会的組織をきわめて特有に形づくること（たとえば、話し手の発話と聞き手の無言の視覚的表示とが、ひとつの発話順番とその発話順番で生じる発言の意味とを協働してつくりあげる、といったように）。さらに、2) 局所的な協働の変容域のなかで、行為場面の多元性を生み出す高密度な基質が、刻々と過ぎ行く時間のなかで、累積し差異化していくことが可能となる。行為がおこなわれるそれぞれの場面には、特定コミュニティの生活世界を賦活する諸活動の達成に必要な、特定の文化的実践に習熟した有能な成員たちが住まうのでなければならない。知の多様な生態系の発展的展開とその内部での徒弟関係による学びを通じて、コミュニティはその成員たちに、まさに現在進行しつつある、状況に埋め込まれた行為の達成を可能にするようなやり方で相互に理解しあうのに必要な資源を授ける。このような意味において、人は、互いの行為のなかに住処（すみか）をもつのである。

## キーワード

共-操作的 (協働的) 行為, 基質, 社会的実践としての失語症, 人間の道具使用, 認識の生態系, 多層化された行為, 連結の実践としての音調, 状況に埋め込まれた知識, 協働的変容域

## 1 人間行為をつくり上げること

行為は、人間の言語と人間の社会性の双方にとって、中心的な重要性を有する (Enfield and Levinson 2006; Levinson 2012; Sacks et al. 1974). 対面的相互行為において、言語の本質的に対話的な組織 (Linell 2009) は、相互行為の参与者たちが、他者に対する志向を伴いながら生み出すさまざまな異なる種類の記号論的な素材に対して操作を施すことにより行為やその諸単位を組み立てていくなかで、創発的で複数人が関与するプロセスとして構成される (Goodwin 1979, 1980, 2000; Iwasaki 2011; Kaukomaa et al. in press). 本論文は、公的基質 (public substrate) [相互行為の参与者たちが共に利用可能な素材としての先行行為であり、これに何らかの操作を施していくことで新たな行為が生み出される。この概念については以下の本文で説明される] に対する系統的な操作によって、いかにして行為が組み立てられるのかを探求するものである。公的基質は、行為が組み立てられる際に、再利用、分解、変形されうるさまざまな資源を与えてくれるのである。こうした過程では、新しい行為の出発点となる環境を与える構造は、修正を受けながらも維持される点で、この過程は累積的なものであり、この過程の累積的な性格こそ、人間の文化や社会の固有の組織化にとって中心的な重要性を有するものなのである。こうした累積を通じて、きわめて多岐にわたる場面、諸文化、そして世界を知りそれに操作を施すための固有の方法が、それぞれのコミュニティのなかに内生的に創出され、そこに埋め込まれるのである。したがって、こうしたコミュニティの成員は、行為の内在的な秩序それ自体の一部として、適切なやり方で、世界を眼差し、世界を理解し、世界に何らかの操作を施すことができると信頼できる新たな成員を生み出すという課題に取り組むのである。

1 トニー: お前, 庭から出ていったらどうなんだよ.

2 チョッパー: お前, 庭から俺を出ていかせたらどうなんだよ.

1 Tony: Why don't you get out my yard.

2 Chopper: Why don't you **make me** get out the yard.

図1 公的基質によって与えられた資源を変容させつつ再利用することで新たな行為を組み立てる<sup>1)</sup>

## 2 基質に対して元の構造を維持しつつ変容を生じさせること

行為者は、先立つ行為によって与えられる資源を選択的に再利用することによって、新しい行為を組み立てることができる。図1はその例である<sup>1)</sup>。チョッパー (Chopper) は2行目で、「俺を出ていかせ (*make me*)」という言葉を使って、自分に向けて発せられたトニー (Tony) の異議申し立て (*challenge*) を、自分自身による新たな対抗-異議申し立て (*a new counter-challenge*) のなかに埋め込むというやり方で、自分に向けられたトニーの発言を再利用している。

チョッパーは2行目で自己の発言を次のように組み立てている。つまり、1) トニーの発話の言語構造を分解 (つまり、チョッパーは、トニーの発話をふたつの部分に分け、その間に自身の新しい発話を挿入する) するとともに、2) 新しい素材を付け加えることで、自分自身のまったく異なる行為を産出しているのである。チョッパーはしたがって、公的な記号構造であるトニーの発話に操作を施すことで後続の行為を組み立てているのであり、公的な記号構造とはすなわち、自分自身の新しい行為を組み立てるために再利用することができる資源ということを意味している。他者が産出した言語構造を分解、再利用、変容させつつ後続の発話を組み立てることは、文法が公的かつ社会的な実践のひとつの形式として働くための中心的な場なのである。

生み出されつつある行為の出発点として使用されている環境のなかに見いだ

1) また、フォーマット結合 (*format tying*) や対話的文法 (*Du Bois in press*) のより詳細な分析は Goodwin and Goodwin (1987b) を参照。

されうる、公的な資源を変容させつつ再利用することで新しい行為をつくりあげてゆくというこの過程は、きわめて普遍的なものである<sup>2)</sup>。この点は、本稿で検討するすべての行為が本質的にもつ構成的な特徴として論じられてゆくだろう。簡明のために、私は1行目におけるトニーの発言のような、それに対して操作がなされる素材を、**基質 (a substrate)** と呼ぶ。

またこの過程にはふたつの重要な特徴がある。第1に、後続の行為者は、基質をそのまま利用するのではなく、基質に備わる資源を変容させつつ再利用することで、基質を何らかの新たなものへと変化させる（このことは、たとえば、「**お前 (you)**」という同じ言葉が話者交替に伴い異なる対象を指示する場合のように、言葉が変わらなくとももちろん起こりうる）。そして第2に、修正がなされるにもかかわらず、元の基質により利用可能となった素材は、関連性がわかるような形式で保持される。つまりこの過程は、1) 先行行為者の活動の構造を保持しつつ、2) 当の構造を系統的に変容させることで何らかの新たなものをつくりだすという点において、人間の行為の有するきわめて中心的で固有の特徴であり、この特徴が人間の文化や知識が系統だったやり方で累積していくことを可能にするのである。たとえば、アイザック・ニュートン (Isaac Newton) は、惑星運動に関するケプラー (Johannes Kepler) の法則に一般化と変容を施しつつその法則に依拠して万有引力の法則を打ち立てたが、ケプラーの法則もまた、ティコ・ブラーエ (Tycho Brahe) による宇宙観測をケプラーが利用しえたことによって可能となったのである。

既存の公的基質に対して操作を施すことによって新たな行為を組み立てることは、相互行為の参与者たちがどのようにして後続する発言の意味を理解するのかという点についても中心的な重要性がある。たとえば、「**いや [いいえ] (No)**」という語のみによって構成される発言順番について考えてみよう。この語を使い、他の人物によって産出される公的構造に対し特定の操作をおこなうことで、非同意が組み立てられる、つまり、[他者の] 先行発話と行為に反対が

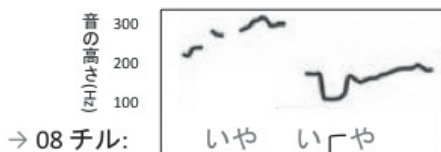
2) 会話分析の研究者によれば、先行発話に結びつくものとしては聞こえない発言順番（つまり、本文での議論の観点では、先行する局所的基質に対する操作としては分析されるべきでない発言順番）は、明示的な場違い標識 (misplacement marker) により開始されるという特徴がある (Schegloff and Sacks 1973)。

なされる。「いや (No)」という発語は、世界内に存在する何ものに対しても向けられている不定形な反対としてではなく、直前に言われたことに対する反対として聞かれるのである。「いや (No)」は、孤立した自己完結的単位としては単独で成立することはない。「いや (No)」は、先行する発話順番において他者により言われたことを、その発話の組織自体の決定的に重要な特徴として裡に含むものなのである<sup>3)</sup>。基質としての先行発話に対して十分注意も考慮もなされない場合には、「いや (No)」という語によって産出される行為は適切には理解されないことになるだろう。以上のことは、まったくもってありふれたことと思われるかもしれない（以上のことが人間行為の普遍的特徴の現れなのだとすれば、たしかにありふれたものであるはずではあるが）。

しかしながら、発話可能な語彙が「うん (Yes)」と「いや (No)」だけに限定されているような人の事例を考えてみよう。1979年、チル (Chil) が65歳だったとき、彼の左脳の血管が破裂した。それ以来彼の右半身は完全に麻痺し、使用可能な語彙は、「うん (Yes)」、「いや (No)」、「で (And)」の3語だけになってしまった。話者としては、チルは統語構造をほとんどもっていない。チルは、「うん (Yes)」と「いや (No)」とを限定的に組み合わせること（たとえば、「いや、いや (No no)」、「いや、いや、いや (No no no)」、「うん、いや (Yes No)」、「うん、で (Yes And)」など）はできるが、これがチルの言語記号を組み合わせる能力の限界なのである。しかし、このことは、複数の記号を組み合わせる複雑な統一体へ統合することで行為を組み立てる能力がチルには欠けているということの意味するのだろうか。たしかに、語彙が限られていることで、チルは、異なる諸記号を柔軟かつ豊かに組み合わせるといふ人間言語に顕著な特徴を産出する能力を欠いているようにみえるかもしれない。だがそれにもかかわらず、チルはたいへん力強く会話の話し手としての役割を果たし続けていたのである。それはいかにして可能であったのだろうか。

3) 発話の結びつけ技術 (Tying Techniques) についての Harvey Sacks のすばらしい講義 (1996: 716-21) を参照。

(a) 07 チャック: じゅうぶん食べた?



→ 08 チル:

いや いや

09 チャック:

ほし

10 チャック: 僕にもう少しとってきてほしいの(.)

違う

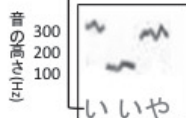
→ 11 チル:

12 (0.9)

13 チャック: それを僕にむこうに片付けてほしいの

→ 14 チル:

いや いや



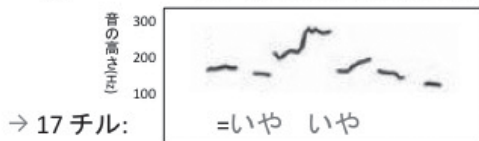
積層された行為

スタンス: 音調  
目標: 語彙-意味論的構造

(b) 15 チャック: あ: それがいいんだね うん あな-

16

あ そ-それを僕らにもって帰れって=



→ 17 チル:

=いや いや

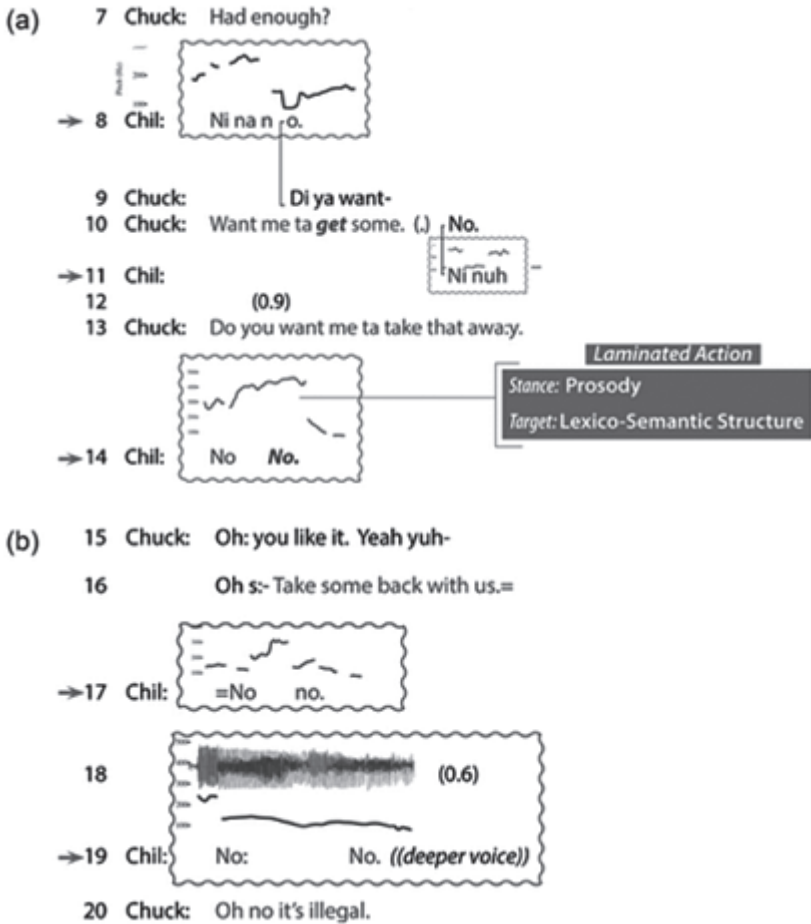
18



→ 19 チル:

いや: いや((深い声))

20 チャック: ダメだよ それ違法なんだよ

図2 同じ語彙を使った多様な行為<sup>ii</sup>

チルは、言語を孤立した自己充足的システムとして扱うのではなく、構造的に異なる種類の資源を、それぞれの資源が互いに精緻化し合うような統合態 (configurations) へとまとめあげることで、つまり共-操作的な行為<sup>iii</sup>として、自己の発話を組み立てているのである<sup>4)</sup>。チルの語彙はきわめて乏しいにもかか

4) さまざまな記号論的資源の同時使用を通じて行為がいかに組み立てられるかについて、近

ならず、豊かで流暢な音調を失ってはいない。Goodwin (2010b) は次のような状況を記述している。チルは息子のチャック (Chuck) に何かをさせようとしている。チルは、食べ終わったグレープフルーツの食べ残しが入った自分の膝の上のボウルを指さし、次に自分の前方を指さす、という動作を何度も繰り返す。明らかにチルはチャックにそのグレープフルーツに関して何かをして欲しいようである。しかしチャックは、何度も推測を試みても、どのような行為が求められているのかどうしてもわからない。この行為連鎖におけるチルの発話のほとんどすべては、用いられた語彙の内容としては事実上同一である。すなわち、チャックが示した提案の候補群を、「いや、いや (No No)」やそれに類した発話を使って拒絶しているのである (図2)。

図2におけるチルの発話は、チャックによってたった今産出された発言に対して系統的な操作を施すことにより、——基本的には強い非同意の形式を産出することにより——組み立てられている。チルによる「いや、いや (No No)」という言葉の反復のそれぞれのなかに、その発話の適切な意味を構成する決定的に重要な要素として、拒絶されている直前の発話が含ま込まれている。したがって、ひとつの行為として考えてみれば、11行目では、チルはチャックにグレープフルーツを自分に「もう少し取って」欲しいわけではないし、14行目では、チャックに「それ」(グレープフルーツの食べ残しが入っているボウル)を片付けて欲しいわけでもなく、17行目では、チャックに食べ残しを「[カリフォルニアに]もって帰って」欲しいわけでもない、ということになる。ほとんど同一の語彙を使用しつつ、これらの発話はそれぞれまったく異なる行為をつくり上げるとともに、更には、つくり上げられたこれらの行為のそれぞれは、その行為が生じている局所的な環境に細部にわたって適合するような行為なのである。きわめて語彙が限られていても、チルは「いや (No)」を使って、他者の産出した豊かな言語構造を文脈依存的な (indexically) やり方で自分自身の行為に統合することにより、多様に異なる事柄についてきめ細かな精確さで語ることができるのである (Goodwin 2007b)。チルの語彙が乏しく、実際にはほとんど

---

年の他の分析としては、Agha (2007), Barth-Weingarten et al. (2010), Enfield (2009), Heath et al. (2010), Hindmarsh and Pilnick (2007), Kendon (2009), Mondada (2009), および Streeck et al. (2011) 所収の諸論文を参照。



欠如していても、チルの意味世界は豊かなものである。その理由は、他者によって創出された基質に対してその構造を保持しつつ変容操作をおこなうという、チルの発言の組み立てられ方にあるのである。

## 2.1 相互行為における秩序創出の資源としての公的基質

論旨をより明確にするために、行為の局所的かつ公的な統合態（たとえば、図1の1行目におけるトニー<sup>iv</sup>の発言）を記述するにあたって、私がなぜ**基質**という用語を選んだのか、もう少し明らかにしておくことが有益だろう。基質とは、後続の行為を組み立てるために（しばしば解体、再利用、文脈依存的な取り込み（indexical incorporation）を通じて）何らかの操作が施される対象のことである。生化学では、「基質とは、酵素によって化学反応を触媒される分子などの物質」であり、この過程によって基質は「単一ないし複数の生成物へと」変容する（Wikipediaのbiochemistryの項目より、[https://en.wikipedia.org/wiki/Substrate\\_](https://en.wikipedia.org/wiki/Substrate_)）。現在の環境にある資源を新しいものへと変容させるこの過程は、私が本稿で扱う変容過程と対応するものである。基質に対する私の当初の関心は、初期地球における活発な火山活動の時期に、軽石ラフトが生命の最初の化学的形成を可能にする基質となった可能性があるという仮説を読んだことにより呼び起こされた。こうした軽石ラフトは濃縮され、「生命発生に必要な化学反応物質の多様性」の選択に寄与するとともに、生命発生にとって適切な化学反応が生じる化学的区画となった可能性がある（Brasier et al. 2011: 725）。さまざまな記号論的資源が時間をかけて接合・累積することで公的統合態を形成し、この複合体に対して精確で局所的な操作を施すことで新しい行為を組み立てることが可能になる。[統合態が形成される]この場合こそ、本稿で展開する人間行為への視点にとって中心的な重要性をもつものである。この基質という観念により、変容が生ずる場である記号論的異質性の創発的かつ局所的な統合態に対して、明晰に焦点を向けるすべが与えられるのである。

インゴルド（Ingold 2011: 10）は、その興味深い論考のなかで、基質という用語を、行為者が構造を課すことで形象が与えられる空白の表面を記述するために使用している。私の基質概念の使用はそれとはまったく異なり、基質と基質が与える資源とが、どのようにして特定形式の後続行為を生み出すことを可能

にするかに焦点を向けている。チルの状況は、基質が、意味と行為の構築のための資源の宝庫としてどれほど重要なのかということの一例を与えてくれる。チルの娘であるパット (Pat) は、発作の後に父親の記憶がむしろ向上したことに気が付いた。辻褃の合う新たな発言を組み立てるために、チルには基質が必要であった。その基質を自分のものとして、それに対して何らかの操作を施すことによって、自身が考えていることを他者に対して示すことができたのである (Goodwin 2007b)。つまり、チルは、他者に対し自分が考えていることを言いたい場合、言いたいことを公然と示すために利用できる基質 (典型的には他人の発言) がみつかるまで言いたいことを頭のなかに懸命にとどめることに努めざるをえない状況にしばしば身を置いたのである。

すなわち基質とは、なんらかの網羅的な文脈のことを指すのではなく、きわめて多様な資源をともなった、即時的現在に生じている、記号論的地表のことである。この記号論的地表は、現在進行中の行為のなかで、この瞬間において累積していく、変容を生じさせる行為連鎖を通じて、現在の形象が与えられているのである。現在の行為をつくり上げているきわめて限定された諸資源の組み合わせが、次に産出されるべき行為の出発点となる。軽石ラフトを含有する環境において、軽石ラフトが化学物質を選択的に特定の配列へと凝集させるのと同様に、現在存在する基質は、現在進行中の特定の行為の組織のなかに含まれた、限定的ではあるが固有の適切さをもつ資源の集合をまとめ上げることで、一貫性を組織化するのである。相互行為の参与者たちは、これらの資源 (図1で最初の異議申し立てをするためにトニーが使った語や、図2で [チルの発話] の直前になされたチャックの発言のような資源) にのみ注意を向けるのではなく、能動的にそれらの資源を利用して、他者と協同的に、直前に言われたことから整合的に生じる後続する意味や行為を組み立てるのであり、今度はこれがその次に生じる意味や行為が構成されるための素材を提供することになるのである。

### 3 人間行為の積層的組織

図2のチルの発言には、語彙的要素だけでなく、豊かで多様な音調が含まれ

ている。Goodwin (2000) で私は、人間は異なった種類の記号をまとめ上げることによって行為を組み立て、それぞれの記号はその組織に枢要な固有の媒体の内で組織化されると主張した。それゆえ、石けり遊びの格子模様によって与えられる記号論的構造は、ある媒体（石蹴り遊びの格子模様が描かれる道路）の上に刻み込まれて、重みをもった生身の身体がその媒体の上を飛び跳ねていくことができる場合にのみ、有意味な行為を可能にする。各媒体において組織化される記号現象（語彙構造、音調、視覚的な身体表示、などなど）のそれぞれの固有な形式を、**記号論的領野 (semiotic field)** と呼ぶことができる。そして、瞬時瞬時行為を組み立てるために参加者が実際に注意を向けるこの記号論的領野の特定の組み合わせを**文脈的統合態 (contextual configuration)** と呼ぶことができる。この産出的な異種性、すなわち異種の素材を同時に使用することで行為をつくりあげるための能力こそが、人間行為の中心に位置する能力なのである。

私は、本稿の論旨をできる限り簡潔明瞭にするため、図2でのチルの使用した発話「いや いや (No No)」とその音調の同時使用に焦点を絞って議論してきたが、ジェスチャーや身体の向きなどを含む他の広範な記号論的領野もまた、チルがそこで組み立てる行為の組織にとって中心的な重要をもっているのである (Goodwin 2010b, 2011)。本稿の以下では、さまざまな資源の諸層として組織される異なった記号論的領野を記述するために、**積層化 (lamination)** という言葉を使っていく。**積層化** という言葉は比喩として使うには限界もあるが、さまざまな理由から、私はこの言葉を使用することにした。第1に私は、積層化という観念がもたらす視覚的イメージ——互いに反映し合いながら組織化され諸層<sup>レイヤー</sup>の特定の組み合わせ——が、まったく異なる特性をもつさまざまな記号論的領野が互いに協働的に働きかけ合いながら、ほんの数秒間しか続かないかもしれないとしても、豊かで分析的に興味深く複雑な内的構造をもつ行為がいかにして組み立てられるのか、ということについて簡明で生き生きとしたイメージを提供してくれることに気が付いたからである (図2を参照)。本稿でこれまで示してきた図の大半と同様に、データの提示を系統的におこなうために積層化の考えを使用することで、語られた言葉を単に記録することにとどまらず、ヴィトゲンシュタイン (Wittgenstein 1958: 122節) が「語の使用についての展望を与える表現は、その語についての理解を与えるが、その理解とは、我々がそ

の語のさまざまな使用の間の「[諸関係]を見る」<sup>v</sup>ことにおいて、まさに成り立つ」と述べたことを見出すことが可能になる。そうすることで、連鎖的な積層化の場合と同様、同時的・共起的な積層化における基質について理解することも可能になり、また、特定の記号論的領野が、さまざまな意味生成の実践が共に作動し合って特定の行為を組み立てていることにかに寄与するののかということについて、明確に理解することを可能にしてくれるからである。

積層化の観念を使用する第二の理由は、私がペンシルバニア大学の大学院生であったころ、ある授業でアーヴィング・ゴフマン (Erving Goffman) が、人間の相互行為における行為と参与者双方の積層化された組織について頻繁に言及していたことによる。ゴフマンは、当時、話し手 (the speaker) の概念を脱構築しようとしており、最終的には「フットイング (footing)」(Goffman 1981) のなかでそれを展開することになる。ゴフマンの趣旨は、そのような積層化された組織が多様な現象の諸層に広く存在しているということであった (つまり、単一の発話にも、その発話により生み出される登場人物のまことに多様な声 (voice) や、話し手が引用した発言に対するその話し手の態度やコメントなどが含まれる)。ゴフマンが「フットイング」で展開したこのモデルは、話し手にのみ焦点を当てるものであることから本稿では採用しないが、積層化の観念は、今なお、相互行為の参与者たちがお互いに協調しながら行為を組み立てるために利用するさまざまな構造を分析上峻別するための生産的な資源であると私は考えている。

### 3.1 他者の発言と行為の脱積層化

積層された行為の構造とは、行為がさまざまな記号論的素材の諸層によって構成されるあり方のことであるが、相互行為のなかで相互行為の参与者たちは、この積層的構造を解体したり再構成したりすることによって後続の行為をつくり上げることもできるのである。再び、チルがその実例を示してくれる。

積層を使用して創造的に行為を組み立てるチルの能力は、極端に少ない彼の語彙には限定されていない。チルは、他者により組み立てられた語彙的・文法的に複雑な発言に表情豊かな音調を添えることによって、自分だけでは言えないことを言うために他者の言葉や言語能力を利用することができる。図3がそ

の例である。

チルの息子であるチャックはカリフォルニアに住んでおり、ニュージャージーにあるチルの自宅を訪れている。この場面には、一方に発言の主要な宛先としてチャックが、他方にチルとパットがおり、彼らの間には、以下のようにチルの友人に関する一定の知識の分布 (a relevant distribution of knowledge) が存在している。パットはチルの娘であり、ニューヨーク地区のチルの自宅の近所に住んでいる。三人はチルの友人について話しており、チャックはその友人の名前を知っている程度だが、パットはその友人のことをたいへんよく知っている。つまり、ここで検討する会話は、チャックが「[事情を] 知らざる受け手 (an Unknowing Recipient)」でありチルとパットが「[事情を] 知る受け手 (Knowing Recipients)」であるという一定の知識主張に関する生態系 (an epistemic ecology) <sup>vi</sup>において生じているのである (Goodwin 1981)。

図3の1行目でチャックは、話題になっているその友人が放射線技師か否か尋ねる。パットはそれに応答して、7, 8行目で、その友人が有名なコロンビア・プレスビテリアン医療センターの放射線科主任であると答える。パットの返答発話には評価的な音調の高まりは一切含まれていない。しかし、9行目でチルは、長いひと続きの音調曲線をもつ一連の音節を発声し続けて、パットの発話にオーバーラップさせる。これによって、チルは、パットの発言に対して自己の強い評価的な態度を示すことができたのである。要するに、チルは、パットが作り出した豊かな語彙と文法構造とはそのままに維持してそれを自身の目的のために使用しながらも、パットの発言の音調をチル自身の音調と置き換えることで、パットの発話を再積層化しているのである。チルの発声はパットの発話と同時に産出されているので、私はチルとパットによる分かちがたく結びつけられた協働的な寄与を分離して、それぞれの異なる音調の軌跡を示すことはできない。実際に、オーバーラップしながら同時に生起しているチルとパットの行為こそが、まさに以下の分析で取り上げようとする現象なのである。

チルは、パットが言っていることにただ同調しているのではなく、パットのニュースの告知に新しい評価を付加することによって、パットがおこなう友人の職業についての報告を、特別な高い地位に就いた自身の友人についての定式化へと変容させているのである。参加者たちみずからが、チルのふるまいをこ

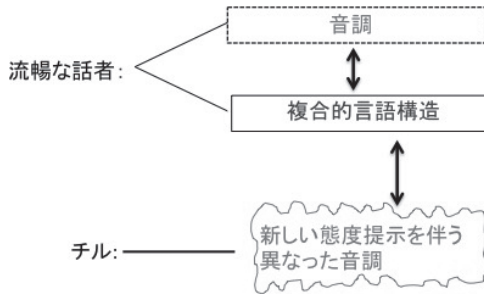
のような評価として実際に扱っていることは、14行目でチャックの「ワーオ (Wow)」という発話からも証拠立てられる。さらにチルのふるまいが評価的な側面をもつことは、この会話のその後の展開からも裏付けられる。パットの発言のチルによる再定式化は、チルが独立した新たな語りを開始するための出発点になっているのである(この会話部分については本稿では検討しない)。

チルは音調を使って、パットが言っていないことを言っているのだが、それをするためにチルはパットの発話内容を利用するのである。チルはこのようにして、パットの発話にたんに同調 (affiliate) するのではなく、独立した話し手としてふるまっているのである。

チルがパットの音調を自分の音調に置き換えることでパットの行為を変容させたこの能力は、多様な記号論的領野が動的に相互作用し互いに精緻化することで行為が構成されるあり様を示している。チルの発話とパットの発話のなかの命題を述べるために用いられている言葉自体は、文字通りまったく同一のものである。というのも、その言葉はパット一人によって産出されたものだからだ。しかしながら、チルとパットはそれぞれ、共通の言語構造に対して、音調を使って独自の態度提示を積層させることにより、微妙に異なる行為を産出している。チルは、パットによって与えられた基質に対し、パットの発話と同時に音調を巧みに用いることで、変容操作をおこない、自身の行為を組み立てている。実際に、相互行為における発話において行為がいかに組み立てられたり相互理解がいかに示されたりするのかについての分析の多くは、連鎖組織に照準するものが大半であり、たとえば、ある発話がどのように理解されたかは、その発話に後続する応答を通じて明らかになるとされる<sup>5)</sup>。しかし、このように、行為の同時的、共起的な組織化もまた等しく重要なのである。さまざまな種類の記号論的資源をお互いに提供し合うことで、構造的に異なる立場にいる行為者たち(たとえば、話し手と聞き手、物語の語り手とその物語中の主要登場人物たち)が、単一の行為が組み立てられることに対して重要な貢献をなすことができるのである (Goodwin 1980, 1984; Goodwin and Goodwin 1987a; Iwasaki 2011)。

5) Levinson (2012) は、ある発言順番にいかなる行為が割り当てられているかは、「次の話者の応答によって明らかにされる」と主張している。

(a) 態度提示を積載すること



(b)

1	チャック	彼は放射線科医師だった？	
2		(0.3)	
3	パット	うん	
4		(0.3)	
5	チャック	ふうん	
6		(0.5)	
7	パット	彼は放射線科の主任だったの	チルの発話と行為における「話者」と「文組成構造」が二人の参与者間に分散されている
8		コロニア・プレスビテリアン医療センターの	
9	チル	「そう そそそそそ そ うーん」	
10	チャック		
11	チル	「そ そ そ	チルの視線は、パットではなく、チャックを宛先として扱っている
12	チャック	ふうん (0.4)	
13			
14	チャック	へえ	話し手の立場をとる
15		(0.3)	
16	チャック	(うむ)	

K-
K+
K+

(事情を)知らざる 受け手      (事情を)知る 話し手たち



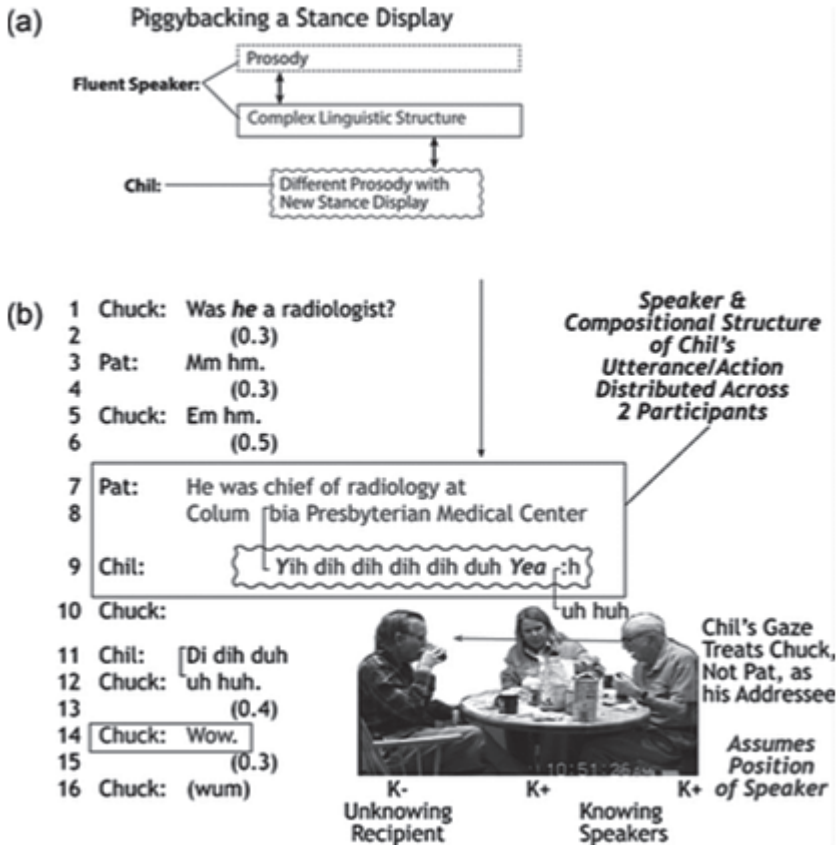


図3 他者の言語能力の私物化<sup>vii</sup>

以上のことは、さまざまな理論的帰結をもたらす。チルにとって（とはいえ私は話し手一般にとって、と言いたいのだが）、発話とその話し手とは共に、分散的存在（a distributed existence）なのである。チルの発話を適切に理解するために決定的に重要な要素は、他者により、すなわち会話の相手により作り出されたものなのである。チルの行為は本質的に協働的（つまり、チル以外の参加者が、チルがここで組み立てる行為にとって必要なさまざまな素材を産出するということ）かつ、徹底的に社会的なものである。それは、チルが、他者によ



て産出された言語構造に対して系統的な操作を施すことによって意味を組み立てているという点において、そうなのである。ゴフマン(1981)による話し手の概念の解体によってもたらされた概念区分を用いるならば、チルは、発話内の特定の命題を産出して特定形式の行為をおこなうことの責任を担う会話参加者、すなわち「責任主体(principal)」としてふるまっているのである。しかし他方で、チルの発話の「執筆者(author)」、つまりチルの行為を理解するために必要な命題を明確に述べるための言語記号複合体をつくり上げる者は、チル以外の会話参加者なのである。実際に、チルには、ここでの自身の発話内の命題を述べるのに必要な記号複合体を、自分自身でつくり出すことは文字通り不可能なのである。

ここで起こっていることは、バフチン(Bakhtin 1981:293-94)によってなされた議論の鮮明な実例を提供している。いわく、

言葉の中の言葉は、なかば他者の言葉である。それが<自分の>言葉となるのは、話者がある言葉の中に自分の志向とアクセントとをすまわせ、言葉を支配し、言葉を自己の意味と表現の志向性に吸収した時である。この収奪の瞬間まで、言葉は中性的で非人格的な言語の中に存在しているのではなく、(なぜなら話者は、言葉を辞書の中から選び出すわけではないのだから!)、他者の唇の上に、他者のコンテクストの中に、他者の志向に奉仕して存在している。つまり、言葉は必然的にそこから獲得して、自己のものとしなければならないものなのだ<sup>viii</sup>。

確かに次のようにいえるかもしれない。すなわち、チルがここで起こっていることはチルだけができる特別なことであり、自身で言語構造を産出する能力が欠如していることへの、まことに創造的ではあるが常識はずれなやり方での対応なのだ。しかしながら、日常会話で流ちょうに話すことのできる話し手もまた、自己の発話を組み立てるために他者が使用した記号論的領野の諸層を分解することで、自己の行為を組み立てているのである。Goodwin and Goodwin (1992) で記述されているのは、物語の語り手が両手のジェスチャーを精妙に駆使して、歩行の様子を描写している相互行為場面のビデオ録画である。受け手

はその後、語り手がおこなったと同様のジェスチャーを繰り返すのだが、その際にそのジェスチャーに発話、つまり「子ウサギのフーフー (Little Bunny Fou Fou)」<sup>ix</sup>の歌詞を付け加えて、そのジェスチャーを繰り返しおこないながら、最初の物語の語り手の発話を邪魔しているそのパロディーへの肯定的評価を、別の参与者から求めるのである。より一般的に言えば、次の順番における修復開始 (next turn repair initiation) (Schegloff et al. 1977) や、あからさまな訂正 (aggravated correction) (Goodwin 1983) は、しばしば、先行発話者による直前の発話順番での発話の一部を繰り返しつつ、同時に先行発話の音調を疑義や対立を表示する音調に置き換えることによってなされる。相互行為の参与者たちは、発話を、さまざまな記号現象の異なった諸層が動的に相互作用することで構成された複合構造として扱っただけでなく、そうした複合構造を解体しその一部を再利用しつつ、同時に、自己自身のものとして再利用したその構造がどのように理解されるべきかについて、それを新たな文脈の統合態のなかに埋め込むことによって、変容させることができるのである (Goodwin 2000)。

チルの話し手としての立場は、チルが自身の身体を組織化するやり方を通じて明らかにされている。つまり、チルは自分を、単にパットの発話の受け手として位置づけるのみではなく、チャックに向けて眉をあげながら発声を開始することで、パットの発話を自分が承認しているということをチャックに示しているのである。次にチルは、発声の途中でパットに短く視線を向けるが、強められた「うーん (Yea:h)」を発話して発話順番を終了させるよりかなり前の時点で、すぐに視線をチャックへと戻すのである (図3参照)。チルは、このように自己の身体を使ってチャックに自己の発話を宛てているのだが、これによりチルが達成している行為は、誰かに自分の友人の高い社会的地位をひとつのニュースとして語るという行為なのである。そしてこの行為は、パットのようなこの件の事情を知っている受け手 (a knowing recipient) (友人がその地位にあるということを示すのに必要な言葉を提供したのは、まさにパットなのであるから) に対しておこなう行為としては不適切なものであり、事情を知らない受け手 (an unknowing recipient) に対しておこなうことが適切な行為なのである。

より簡潔に言えば、チルは、他者によって語られ構築された発言に対し一定の態度と評価とを伴った新たな音調を添えることで、新規の複雑な語彙および

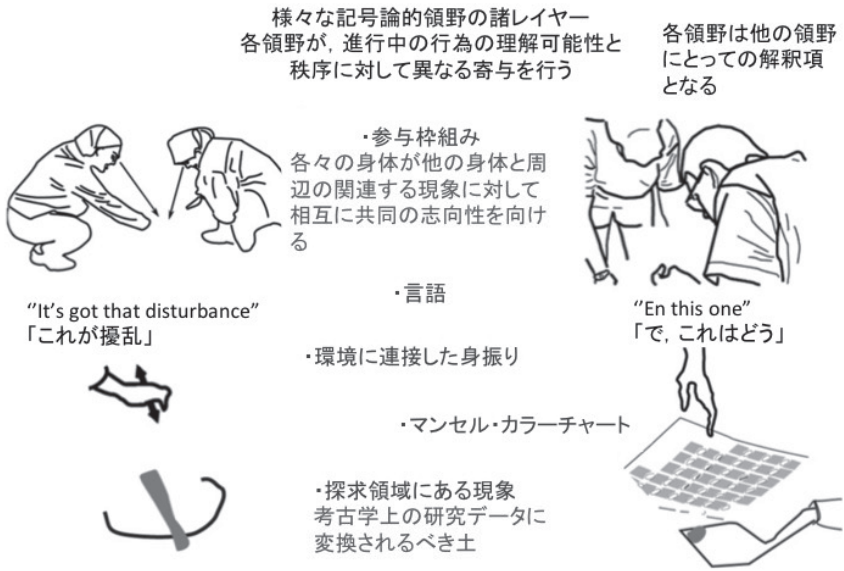
統語体系を組み立てているのである<sup>6)</sup>。私たちはここに、話し手の解体(Goffman 1981)をみることができ、すなわち、見てわかるようなやり方で話し手であることをすること (doing being a speaker) を構成する活動は、複数の身体と別々の行為者によって産出される発話の流れへと分散され、行為者たちは相互反動的 (reflexively) に志向を向け合うとともに、お互いの産出する記号と行為とを自分自身の記号と行為の構成のための資源として利用するのである。つまり、ここでチルが話し手としてふるまう能力には、パットの発話を自分の行為の必須の構成要素として取り込むことが含まれているのである。ここで私たちが見出しているのは、個々の行為者の内部に生じている心的現象に焦点を当てるような「話し手」のモデルではない。むしろ、言語使用の公的組織化を通じて構築される行為が相互行為的に維持されている場に、その場に適切ではあるが差異化されたやり方で参加するという能力によって構成されるような話し手性 (speakership) を見出しているのである (これは、Linell (2009) が人間の言語と行為のもつ本質的に対話的な構造と呼んだものでもある)。

チルの個人としての (たとえば、話題となっている出来事に対してパットとは異なる態度をもつ人としての) 認知的および情緒的な生は、この過程のなか

6) 本論文の匿名の査読者であったフリチョフ・サルストレーム (Fritjof Sahlström) 氏は、積層化という概念自体の適切性については否定しないものの、チルがパットによる行為を解体する際におこなっていることが、本稿で示されている積層化の観念のもつ致命的な限界を証明するものであると述べている。フリチョフ氏によれば、最初に提示された意味での積層化モデルは、サーフボードのように、諸層を接着剤で密着させて固定的で不変の構造とされたものに対してもっとも適切にあてはまるという。このような構造物は、ひとたび作られてしまえば、それを解体することはもはや困難となる。しかしながら、本稿の本文で検討されている「人間の社会性」に関する現象により明らかのように、「人間の社会性にとって積層化は、絶えず偶発的に揺れ動き、記号論的基質という広大な沃野を疾走しているのである。注意を向けるべきは資源そのものではなく、諸資源をまとめ上げていく可能性だろう。ひとつにまとめ上げられた全体は、ひとつの統一体として現れるのみならず、識別可能な諸層により構成されているものとして現れて、今度はその諸層は全参与者によってさらに精緻化されうることになるのである。社会を結び付けている樹脂は、グラスファイバー [繊維ガラス] に使われるような類の樹脂というより、むしろ付箋の裏側の粘着剤のようなものであり、その場その場の実際的な目的のためには十分に (そしてその間はしっかりと) 粘着するが、ひとたび用が済めば簡単に取り外すことができ、それが何に粘着していたのかはあらかじめ決めるわけにはいかないのである。」私はこの深い洞察に富んだ分析に完全に同意する。フリチョフ氏は、私が書いたことを一種の基質として、それに操作を施すことにより、私の議論をさらに前進させているのである。

で失われてしまうのではなく、公的で、有意味な帰結を伴い、生き生きとして、柔軟なものとして作り上げられているのである。これと同じ問題が、彼の行為体〔行為者性〕(agency)の組織にも妥当する。これまで行為体の研究において取り上げられてきた問題のひとつは、個人(an individual)と「社会的な」行為体(social agency)との相違であるが、後者は典型的には、ひとりの個人としてではなく、社会集団や企業集団に属する行為体として論じられてきた。チルの行為者性が、協働的記号の進行過程のなかで組織化されている(たとえば、自分がすべきことを為すために他者によって作り上げられた記号を私有化する)点において、徹頭徹尾社会的なものである。チルは、自分の友人が放射線科医として高い社会的地位に就いていることを語るために、パットの言葉を必要としている。しかしながら、この過程から生まれてくるのは、社会集団のなかへと彼の行為者性が形なく拡散するさまではなく、会話の相手方によって個人としてのチルが行為者性をもつ個人であること、つまり何らかの独自のことを言うことができる人として、認められているということなのである。

本稿全体の趣旨からすれば、行為は、多様な記号論的資源が公的に提示されることを通じて構成される環境のなかで現れる、ということである。行為は部分的には、この基質に対する操作がおこなわれることで作り出される(fashioned)。この**連結的な過程(combinatorial process)**は、行為者が他者によって組み立てられた構造と意味とを自身の行為の内的組織へと系統的に統合することを可能にする。行為者たちは、そのようにすることで、孤立した諸個人としては提示することができないような、知の諸形式を行使することができるのである。その意味において、人間はお互いの行為のなかをその住处(すみか)とするのである。

図4 人間行為の積層化構造<sup>x</sup>

#### 4 人間行為の積層化構造がもつ累積力

人間の行為がまったく異なる記号論的素材の諸層によって構成されるという事実が、失語症による制約に直面するチルに、決定的に重要な資源を与えていた。チルは、積層構造に対して操作を施すことによって、諸要素を結合させる自己自身の行為を組み立てるとともに、他の参加者の行為のなかから見出される重要な記号論的素材、たとえば他参加者による豊富な言語素材を、自分自身の新たな発話へと統合することができたのである。

環境に接続された身振り (Goodwin 2007a) のなかで、指さしは言語を環境のなかの特定の現象に結びつけるために使われる。ここでもまた行為は、さまざまな種類の記号論的諸資源のレイヤーを積み重ねていくことによって組み立てられている。図4は別々の記号論的領野を組み合わせることでのどのように行為が組み立てられるのかを示した簡易な模式図である。それぞれの記号論的領野

は、進行中の行為の理解可能性と秩序に対して異なる固有の寄与をなしている<sup>7)</sup>。図の左側では、先達の考古学者が学生に、地層図<sup>xi</sup>を描く対象となる土壌のなかに生じている**擾乱 (a disturbance)**を認識する方法を教示している。擾乱とは、研究対象である考古学的特徴を損ねてしまうような、後世における活動である。ここで生じている擾乱は、19世紀における人の鋤を用いた活動による土の移動により16世紀のアメリカ先住民の民家を支える柱の痕跡の一部が毀損されたものである。図の左側にいる考古学教授は、鋤の動きによって移動された土のなかの色づいた縞模様の上で手を動かしながら、親指と人差し指を使い縞の幅を示すことによって、学生が擾乱の位置を理解できるようにハイライトしている<sup>8)</sup>。

図4の右側に描かれた行為は、2人の若い考古学者が、掘り起こした土の色を系統的に識別するという課題に従事するものである。土の色を識別するために、考古学者たちはマンセル・カラーチャートを利用する。マンセル・カラーチャート<sup>xii</sup>は、色変化を適切に識別するために科学者が作り上げた格子状の色見本である。それぞれの色格子の横には穴が空いている。考古学者は、色識別の対象となっている土と色見本とを同じ視野で見比べられるように、土のサンプルを載せたコテをカラーチャートの下から、色格子の隣の穴から穴へと移動させる。土と色見本との間の最適な組み合わせとして選ばれた色は、特定の明度と彩度の交点として識別されて、その色の標準名が分類表に記入されるのである (Goodwin 2000)。スー (Sue) は特定の見本色の格子を指さしながら、「で、これはどう」と言うことで、最適色の候補を提案している。ジェフ (Jeff) は、土をのせたコテをスーが提案した色格子の隣の穴へと移動させることで、スーの提案に応答している。

これらふたつの事例において、指さしのジェスチャーがどのようにして環境内の参与者たちの調査対象に結びつけられているのかということに注目してみよ

7) Goodwin (2010a) において私は、人間行為の積層的構造について同様の主張をすでにおこなっている。本稿でこの主張を再びもち出したのは、それが本稿を構成するより広い議論の重要な構成要素となっており、これまでの私の主張を一般化するものでもあるからである。

8) この発話連鎖の分析を含む、「環境に接続した身振り」についてのより詳細な議論については、Goodwin (2007a) を参照。

う。

図4のどちらの事例でも、参加者たちは、異種の意味生成の資源を全体として積層化することによって、行為を組み立てている。互いに相補的な記号論的領野には、以下の4つが含まれる。すなわち、1) 他の参加者と共通作業の対象たる素材とに対する参加者の身体的志向。これが共通の注意の焦点と共同作業の場を生み出す。2) 言語。ここには人間の相互行為における行為の連鎖のなかで組織化された指示表現も含まれる。3) 手の動き。これが環境に接続したジェスチャー (Goodwin 2007a) を産出する。4) これらの帰結としての現象。これが、環境内において参加者たちにより共同的なワークとして活発に探求される対象である。図4での探求の対象は、後に考古学上の研究データに変換されるべき土である。

図4の右の例に示されている行為には、図4の左にはない、更にもうひとつの記号論的領野、つまりマンセル・カラーチャートが含まれている。そこでは、これらのレイヤーの各々がひとつの記号論的資源となっており、他の記号論的資源を解釈するために行行為者によって用いられる。これらの複数のレイヤーに対して新たなレイヤーを挿入することは、単にひとつのレイヤーが付け加わるということの意味するのみではなく、全体的な統合態の秩序を変化させるような、総体的な変容が生じる出来事なのである。たとえば左図の複数の層の秩序だった配列に新たな層としてマンセル・カラーチャートを追加するように、一連の異なる記号論的領野に新たなレイヤーが偶発的に挿入されることによって、可変性、創造性、そして人間の行為組織の強靱な局所的適応、これらへの内在的な起源が与えられるのである。相互行為の参加者たちは、固定した[記号論的領野の]レパートリーに制約されるのではなく、まことにさまざまな素材を、自身が他者と共に組み立てている行為の組織へと統合する能力を有するのである。

マンセル・カラーチャートそれ自体が、特定の行為との関係において適切なやり方で世界を知るための枠組みを作り上げてきた歴史の累積的な産物である。つまり、相補的な諸特性を備えた多様な素材を、ものごとを知覚するための構造となるある程度継続される統合態へと結び合わせることによって、知の枠組みを作り上げられてきた累積的歴史の産物としてマンセル・カラーチャー

トは存在するのである。マンセル・カラーチャートは、次の3つから構成されている。まず色見本となるカラーパッチであり、指さしの対象となるとともに分類されるべき土と視覚的に比較される。次に、特定の色見本を一組の標準色座標・色名称として識別することを可能にする縦横の格子、そして、マンセル・カラーチャートが作られている媒体としての紙である。紙という媒体の独特な物理的特徴に依拠して各色見本の隣に穴があけられ、考古学者が土と色見本とを比較するために利用しうる知覚のための構造が生み出される。

先人たちの活動が、現在の私たちの活動、——たとえば、土の色を識別するためにマンセル・カラーチャートを使うこと、海洋学者が海水標本を海洋のどの地点で採取するかを決めるために海図を使うこと (Goodwin 1995)、特定の法制度においてどのような行為が犯罪とみなされうるかを決定すること (Goodwin 1994) ——を組織するのに有用な詳細さで私たちに伝達されうるやり方は、まことにきめ細かにさまざまに異なるコミュニティが達成しようとしている知識に関する諸活動 (epistemic activities) を形作っている。実際、こうした累積的な諸実践によって、特定形式の活動が可能となる。それは、たとえば被告人に有罪ないし無罪を宣告する、料理を作るためにレシピを読む、あるいは土の色の識別や海水標本の採取位置知るために科学的な地図を作成する、といった活動であり、これらは特定のコミュニティや行為に固有の活動なのである (Knorr-Cetina 1999)。これらの諸活動は、台所、科学実験室、法廷といった場面で頻繁に生じるものであるが、こうした場面では、料理を作る、実験をする、判決を言い渡す、などの行為を達成するために必要な諸資源が、その場面固有の知識に関する要件 (epistemic requirement) とともに集められて、コミュニティ内で特定の形式をもつワークや活動がおこなわれることを可能にする基盤をもたらすのである。こうして集められた諸資源の複合体は、現在の行為者のみではなく、何世代にもわたる人々やさまざまに異なる記号論的諸資源までも広く含みこむものであり、この複合体こそが、人間の知が多種多様な行為形式として組織される態様にとって、中心的な重要性をもつものなのである。

マンセル・カラーチャートは、先人たちが、どのように色を系統的に分類するかという問題に取り組んできた末の歴史上の堆積物である。つまり、それは、必要とされた瞬間に突如出現したわけではなく、発掘作業のための道具の一部



として考古学の調査現場にもたらされたものである。したがって、図4の右側で示したようなその特定の場面にふさわしい局所的な行為は、その行為自体がなされている場面の系統だった特徴（ここでは、考古学の発掘調査現場での活動を組織化する道具の使用）とともに、名も無き先人たちによる関連する諸活動の歴史をも相互反映的に内に組み込むものなのである。こうした累積し続ける歴史は、特定のコミュニティに特徴的な活動にとって適切な知のあり方の堆積物をもたらす（Goodwin 1994; Hutchins 1995）。そして今度は、累積的な歴史が、特定の局所的な行為のもつ知の秩序へと組み込まれるのである。このような積層化された行為の内部では、コミュニティの一部のみが従事するカテゴリー化という豊かな意味を宿した実践——たとえば、色分類のためにマンセル・カラーチャートを使うこと——は、土やほかの物体を拾い上げるとか比較をおこなうといったより一般的な活動と、継ぎ目なく作動しているのである。人間の行為は、それぞれがはっきりと区別された行為類型から構成された普遍的類型により分類されるものではない。それはむしろ、時間を通じて累積され、具体的な場面に応じた適切さをもつ、記号論的かつ社会的諸関係の網の目を喚起するとともにそれを時間とともに堆積させる一連の複雑な複合体（Ingold 2007）なのである。

公的基質に操作を施すことによって次の行為を組み立てるという上記と同一の過程によって、人々が互いに他者から提示された構造に依拠して〔自身の行為〕を組み立てるという本質的に協働的な特徴を人の行為は得るのである。図4の例では、スーはジェフが手にもっているマンセル・カラーチャートに操作を施すことによって自身の行為を組み立て、ジェフはスーがおこなった行為に対して操作を施すことによって自身の行為、——コテをスーが指示した色見本パッチの下に移動させる——を組み立てている。また図1では、チョッパーは、トニーがチョッパーに対して発した発話の言語構造を、変容させつつ再利用することで、自身の行為を組み立てているのである。

人のコミュニティ（考古学などの専門職コミュニティなどを含む）に固有の、創出的、創造的な性格は、先人たちが残した素材により与えられる可能性の累積を、特定の場面に即したふさわしい新たな行為へと変容させる際に創発される、行為・認知・世界知の新たな形式（たとえば、マンセル・カラーチャートを

利用してペアになって土の色を分類すること)の豊かさと多様性とに存する。そして、こうした新たな行為は、台所や化学実験室のような場面との間に、相互反映的に結びついている。ワイトゲンシュタインは(Wittgenstein 1958: 23節)次のように論じている。

無数にある... 私たちが「記号」, 「語」, 「文」と呼ぶものの全てには、無数に異なった種類の使用がある。そしてこの多様性は、固定したもの、断固として与えられたもの、ではない。つまり、言語の新しい形、(私たちが言うところの)新しい言語ゲームが生まれ、他の言語ゲームは廃れ、忘れられるのである<sup>xiii</sup>。

近年ヘリテージ(John Heritage)が雄弁に語っているように、「相互行為の参与者たちの間に知識と知識への権利が現実世界でどのように配分されているかということは、相互行為としての会話の秩序(organization)にとって中心的な重要性をもつものであり、節要素を具現化する発話順番のひとつひとつが産出される際に必ずこうした知識の配分が何らかの働きをしているのである」(Heritage 2012: 24)。マンセル・カラーチャートがそれを利用する人々にとって色の識別を秩序づけるやり方を示すことによって明確に示してきたように、累積的な行為秩序は、特定のコミュニティの探求の対象となる世界——すなわちきわめて多様な人間文化など——を知り・理解する特定のやり方によって維持されるとともに、それによって可能となっているのである。私[著者]にとっては少量の土のなかのさまざまな色の斑点の不定形な集まりとしてしか見ることができないものを、考古学者は古代の家屋を支えていた柱痕として見ることができる。行為が埋め込まれた場面によって与えられた新たな行為のための構造と可能性への精妙な気づきという問題は、現象学者たちによる研究において中心的な理論的重要性を与えられているものである。それゆえに、フッサール(Husserl, 1936: 142)にとって、我々が日常を営む生活世界(lifeworld)とは、「知覚する主体と相関する、時空間のなかにさまざまな形で配置される諸客体の壮大な舞台であり、つねにすでにそこにあり、そして、人間の共有されたすべての経験にとって「基盤」となるものである」<sup>xiv</sup>。

## 5 協働変容域

カテゴリー、語、文<sup>xv</sup>、ヴィトゲンシュタインがいうところの言語ゲームといった、絶えることなく生み出される多種多様な、現象としての対象の一部は、日常的な行為に内在する秩序が、現在進行中の行為により出発点として利用される基質が新たな何ものかへと変容していくための坩堝となることによって出現するのである。

ここまで検討してきた行為はすべて、現在の資源を解体・再利用することで新たなものを創り出す、**協働変容域 (co-operative transformation zones)** の具体例であった。図1の例では、チョッパーはトニーが言った言葉を利用してトニーに異議申し立てをおこなっている。図2の例では、チルの「いや (*No*)」という言葉は、チャックによる先行発話を文脈依存的に取り込むことによって、チャックの提案を拒否すると同時に、音調の積層化を通じて、チャックの行為を不適切かつチルの行為への十分な理解を欠如するものとして特徴づける。図3の例では、チルはパットの言葉に新たな音調を付け加えることにより、パットの中立的記述を、新たな連鎖の開始を促す評価発話へと変容させている。

図4で示した考古学者のふたつの行為はどちらも、ここで達成されようとしている専門家のワークにとって中心的な重要性を有する協働変容域の実例である。基質（ここではマンセル・カラーチャートの使用が追加されることによる複数の基質）に対する構造維持変容操作によって、専門家的探求の焦点である土は、「擾乱」というカテゴリーや特定の科学的色彩名などの、考古学的実践（つまり、考古学の調査現場をどのように層位図に描き出すか）を形作る諸カテゴリーへと変容される。まさにここにおいて、「自然」（ここでは土）が、ひとつの専門職としての考古学のワークと言説とを賦活する文化現象へと変容するのである。さらにいえば、ここで生じていることは、現在の活動により生み出された基質に対するさらなる構造維持変容操作によって秩序づけられた、さらなる展開へと開かれている行為連鎖のワンステップに過ぎない。マンセル・カラーチャートにより識別可能となった色カテゴリーは、分類票に記入されることになるだろう。今その存在が見出された「擾乱」といった現象のカテゴリーは、学生が砂の上にコテでその位置をなぞっている考古学的特徴の輪郭を確定するの

に役立つ。そして、この過程から生みだされる輪郭の形態が、考古学の図面に書き写される。現場調査の時期が終了すると、図面と分類票とは研究室へともち帰られ、さらなる累積的変容を経ることになる。そして、最終的には、論文や書籍での出版という形式でそのクライマックスを迎えるのである。[そしてさらに、その後の考古学的探求に利用される資源となる]<sup>9)</sup>。

行為は、現存する基質の構造や諸資源を入力として利用し、同時に新しく変容した基質を出力として産出する。そしてこの出力された新たな基質が、さらに次の行為の出発点となる（そして、さらにそれが同様に続く）。一人の話者による個々の発話を考えてみても、この累積的な組織化の存在を示している。つまり、今産出されつつある発話の構成諸要素は単独では意味をなさず、その発話が適切に理解されるためには、その当の発話の冒頭部分が基質となる必要がある。発話順番の新たな後半部分が産出されていくにしたがって、そこまでに言われたことがどのような行為として理解されるべきかが変容する可能性がある（Goodwin 1979）。現在進行中の行為の只中で構成される協働変容域が偏在するという事実は、人間の文化・知識・社会生活の累積的秩序にとって中心的な重要性をもつものなのである。

## 6 人の道具使用

人類が使う道具というものも、言語使用について記述してきた形式的組織と同一の、協働的かつ連結的な形式的組織を有する。本稿に人間の道具使用についての検討が含まれるのは、次のことを例証するためである。つまり、本稿でこれまで探求してきた現象、たとえば、行為の協働組織、この行為組織が異なるさまざまな資源から構築されること、協働変容域内の累積的可変性、そして、固有でかつ差異化された社会的組織といった諸現象が、言語に限られたものではなく、それどころか人類の活動の秩序に関わる、広汎で普遍的な現象として見出せるということである。考古学の調査現場からの例を用いた議論のなかで先に例証したように、道具もまた、行為の積層的組織にとって中心的役割を果

9) 銘刻の連なりについてはラトゥールとウルガーの議論（Latour and Woolgar 1979）を参照。

たし、積層的組織を通じて特定のコミュニティにおける知が構成されていく。

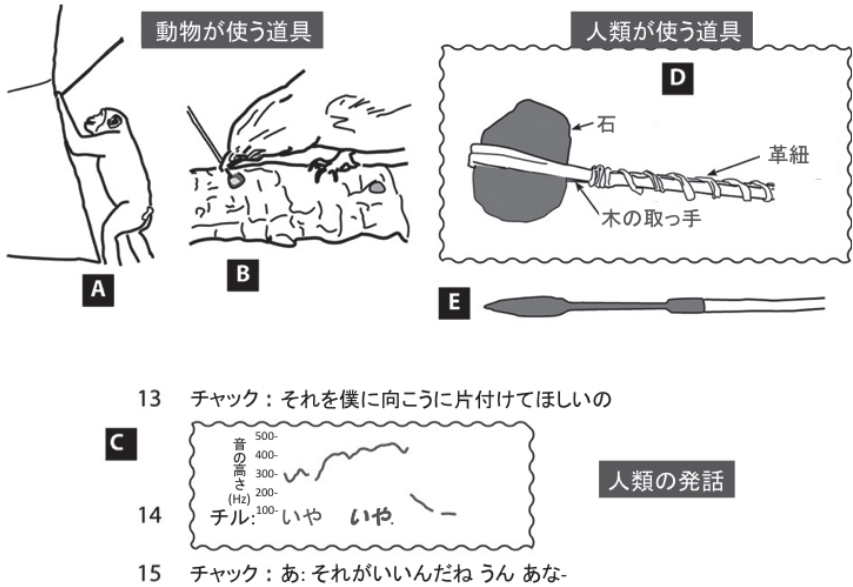


図5 人類が使う道具の連結的な組織<sup>xvi</sup>

人類はこれまで、少なくともアリストテレスまで還る知的伝統のなかでは、道具を使用する動物として定義されてきた。しかし、この百数十年間で、動物もまた道具を使用することが知られるようになった。図5のAは、木からシロアリを釣り出すために小枝を使用しているチンパンジーである。図5のBでも、ガラパゴス諸島のキツキフィンチ<sup>xvii</sup>が昆虫を取るために小枝を使っている。これらAとBの両事例で道具として動物が使用しているのは、1本の小枝である。これらの事例（他にも、ラッコが石を使って貝を開けたり、魚を割いたりすることなども同様である）は両方とも、フィッチ (Fitch 2010: 154) による道具の定義、すなわち、「ある種の目標指向的使用に先立ち、もしくは使用中に、[行為体によって]携行ないし把持される、独立した物体」という定義にあてはまる。この定義は、以下の検討にとって重要である。というのも、この定義が、シロア

りの巣, ミツバチの巣, そしてビーバーのダムといった現象を除外するからである。動物による巣やダムは, さまざまな種類の構成要素を複雑に(ただし, かなり定型的な形式で)配置することを通じて構成されるものであるものの, 一定幅の時間尺度のなかで組織化されるものであり, 局所的で創発的な行為の組織化とはまったくもって異なるものなのである。

上述のように, チルは, そしてまた一般に人間は, 異なるさまざまな素材——たとえば語彙や音調——を臨機応変に組み合わせることによって発話を組み立て, 新しい統一体を生み出す。図5のCは図2の拡張連鎖からの抜粋である。ここでチルは, 「いや, いや (*No No*)」というまったく同一の2語を用いて, この2語に異なる音調曲線を重ね合わせることにより, さまざまな異なる行為を生み出している。それぞれの素材がもつ独自の諸特性は, 発話と統一体としての行為との双方に対して, 別個のまったく異なった寄与をなす。その帰結として生ずるのは, 単一の「モノ」, つまり, 分割不能で不動の行為などではなく, 関係性の網 (Ingold 2007: 75) のように組織された, 相互に精緻化する現象の常に変容しつつある織物なのである。チルの発話, ひいては人間のあらゆる行為は, 先行して存在する資源という基質から組み立てられ, 同時に新たなものをつくりあげるという点において, 累積的な性質をもつものなのである。

図5に示した動物による道具使用は, この(次第に)累積していくかつ連結的な組織<sup>10)</sup>を通常は有してはいない。これに対して, レイノルズ (Reynolds) (1993)が説得的に論じている通り, 人間の道具使用には, こうした性質が備わっている。動物が把持する小枝は, (それを好物の虫を得るために木のなかに突っ込むことで) 環境内の何らかのものに対して操作を施すものであるものの, 道具それ自体は, なにか別々の構成部分から組み立てられているというわけではない (Goodwin 2010c)。つまり, 動物が使用する道具は, さまざまな異なる素材と相互行為の参与者たちの間に関係を築き上げる, 相互に結び付き合う諸資源の織物として構築されてはいない。要するに, 動物が使用する道具には, 累積的組織が備わっていないのである。

10)ただし, 捕獲されたオランウータンを野生復帰させるための保護に関するアン・E・ルッソン (Anne E. Russon) による研究では, オランウータンによる複合的道具の使用などの現象が観察されている。Russon (2004) を参照。

図5のDは、1) 大きな石、2) その石に取り付けられた、取っ手となるしなりやすい木の枝、3) 石と木の枝とをしっかりと結びつける革紐、という3つの異なる素材から組み立てられた石斧である。この斧を分解したとしたり、切り離されたどの素材のなかにも斧それ自体を見出すことができない。別個に存在する諸要素を互いに結びつける関係性の網、まとまりのある統一体というものを形作っているこの組織なしに、そこに見出すことのできるものといえは、ただ、ひとつの石と細長い革紐だけなのである。

ここで述べてきた行為と道具の組織化に見られる形式的特徴は、時間の経過とともに構造が累積することを促す枠組み内部での系統的な変化が生じる空間を創出する。たとえば、斧の先端部分、つまり斧のモノをたたく部分を取手部分に取り付けるには、さまざまなやり方があるだろう。図5でのように、しなりのある木を革紐で縛りつける方法、紐だけで石を取手に結び付ける方法、あるいはまた、何らかの接着材を使う方法、などである。斧頭を取手に結び付けるという課題は、系統的にやり方を変更していく試行によって解くべき、問いの空間を生じさせる。しかしながら、この試行は、斧（または他の行為）の複雑性に対して、複雑な統一体として焦点を当てることは要求しない。むしろ、斧を構成している不変項、たとえば取っ手と石——別種のハンマーや刃物について試行がおこなわれている場合にはその取っ手や柄——は、各構成要素のそれぞれを変更してみるという試行がなされる場合にも、一種の不変の母型(matrix)となっている。つまり、道具、ここでは斧を形作る構成諸要素の形式的配置自体は、たとえその構造内で変更が生じる場合にも、一定不変であり続けるのである。道具は、人間行為の核心となる特徴、すなわち協働的変容域の存在を可能にする組織化原理、により与えられる累積的安定性の裡で、漸進的に多様な種類へと分化していくのである。同様のことが言語構造についても当てはまる。たとえば、視覚上の修復を通じて、「私の息子(my son)」のような名詞句が「私の一番上の息子(my oldest son)」へと変容させられうる。つまり、名詞句「私の息子」は公的に[参与者たちすべてにとって認識可能なやり方で]別個の下位構成要素に分解され、任意の挿入や削除が許容されることになる。こうした分解や変容の可能性は、会話それ自体の内在的性格を通じて、他者にも明らかにされる(Goodwin 2006)。

図3では、他者が組み立てた意味豊かな語彙-統語構造に、チルがチル自身の音調を付け加えることで、ひとつの独立した行為をつくり上げていたことを見た。より一般的に言えば、発話や発話順番は、発話を産出する話し手と、目に見える身体的表示を通じて話し手の発話に何らかの操作を施す聞き手との間の協働を通じて組み立てられる。同様に、道具がさまざまな構成要素を組み合わせで作られるとき、それぞれ異なる立場の行為者たち（たとえば、同一製品について、カリフォルニアのデザイナーと中国の工場労働者）による、道具の連携的かつ社会的な生産が可能となるのである。

発話と石斧は、一見まったく異なった種類の現象であり、実際にそれらは社会科学のまったく異なる学問分野によって分析されている。けれども、発話と石斧は、人間の社会的行為の形式として、重要な形式的組織化の様式を共有している。発話と石斧とは、どちらも異なる種類の素材を組み合わせることによって組み立てられている。このことは、構造的に異なった立場、たとえば話し手と聞き手や商取引の両当事者などのような立場を占める参与者たちが、単一の発話・発話順番・道具あるいは対象物を組み立てるのに必要な構成諸要素の連結的配列のそれぞれ異なる部分について寄与するというような協働的な行為を通じて、固有の形式の連携的社会的組織が作られることを可能にする。このようにして、これらの発話や対象物は、広大で永続的な社会的諸関係のネットワークの結合体となるとともに、累積的变化のための場となるのである。

## 7 協働的行為を通じて適切な知を有する行為者の形成

協働的に行為を組み立てるためには、相互行為の参与者たちはお互いについてとともに、自分たちが共に達成しようとしている諸活動について、それらの諸活動のさらなる進展を可能とするようなやり方で、知り、理解しなければならない。知識の分布 (distributions of knowledge) は、人間行為の多くの形式が有する基本構造に組みこまれているのみではなく、行為が展開していくなかでそれ [知識配分] が変容することで、何らかの帰結を生じさせる (Goodwin 1979, 1980; Heritage 2012)。したがって、人間行為の組織において、知の諸形式は、このように動的生態系 (a dynamic ecology) として組織化されている。既にマンセ



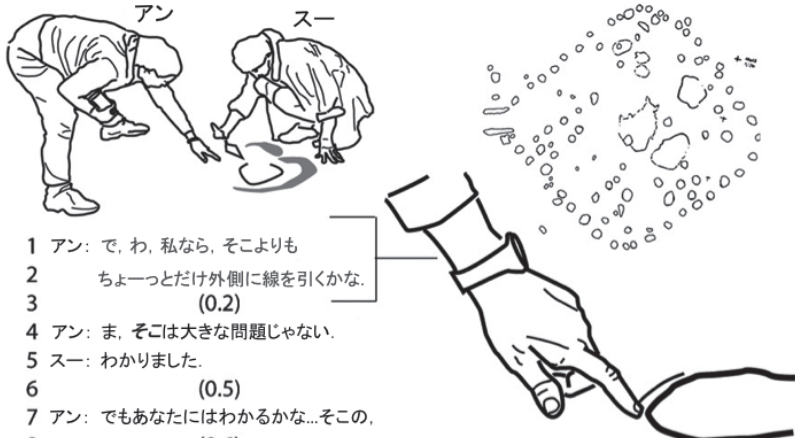
ル・カラーチャートの例で検討したように、この生態系は、先人らが育んできた物事や世界を知る方法の歴史的堆積物を含んでいる。このことは、多様なコミュニティが、それぞれの活動の焦点となっている世界をまったく異なるやり方で知る方法を決定し、新たな行為様式（たとえば、マンセル・カラーチャートを使って色を分類すること）が現れる際になされうる行為の類型を知る方法を決定する。

特定コミュニティ内の作業、知、言説を賦活する、有意味な行為や対象物を実践を通して創出する能力をもつためには、当該コミュニティにおける有能な成員であることが要求される。マンセル・カラーチャートが専門家による実践の一要素として利用される場である協働変容域は、発掘された土が考古学的データへと変換される場であるというだけではない。それは同時に、その活動への参加によって、新参の学生を、熟練した有能な考古学者へと (Mogk and Goodwin 2012)、すなわち、彼らが属するコミュニティ固有の活動を構成する特徴ある行為を組み立てるのに要求される熟達した実践の基盤、つまりハビトゥス (Bourdieu 1977) へと変容させる場でもあるのである。社会的学習、より狭義には教育は、言語や複合的道具の使用と同様、環境に対する人間に固有な適応形態なのである (Cisbra and Gergely 2011)。ほとんど例外なく、人間以外の動物は、年少者に対して明示的に何かを教えたりはしない。それに対して、人間のコミュニティは、実践上有能な新たな成員を生み出すという永続的な課題に直面しているのである。

### 7.1 専門家としてのものの見方を調整すること

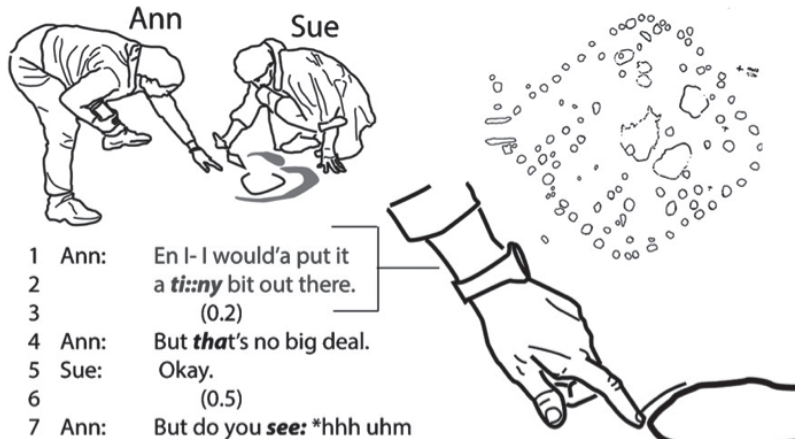
協働的相互調整を通じた徒弟制的学習は、参与者によって組み立てられる諸行為を社会的実践として組織化するための資源を提供するだけではない。それは、当該コミュニティのおこなう作業を規定する行為を遂行するのに必要とされるやり方で、世界を見ること、カテゴリー化すること、かつ何らかの操作を施すことを適切に遂行できると信頼されうる熟達した行為者を、社会的実践として育成するための資源をも提供するのである。図6はその一例である<sup>11)</sup>。

11) この連鎖のより詳細な検討については、Goodwin (2010c) を見よ。



アン スー

- 1 アン: で、わ、私なら、そこよりも
- 2 ちょーっとだけ外側に線を引くかな。
- 3 (0.2)
- 4 アン: ま、そこは大きな問題じゃない。
- 5 スー: わかりました。
- 6 (0.5)
- 7 アン: でもあなたにはわかるかな...そのの、
- 8 (0.6)
- 9 アン: ちょうどそこに:
- 10 (1.5)
- 11 アン: いいですか。
- 12 スー: 私、それがまったくわからないのです。



Ann Sue

- 1 Ann: En l- I would'a put it
- 2 a **ti::ny** bit out there.
- 3 (0.2)
- 4 Ann: But **that's** no big deal.
- 5 Sue: Okay.
- 6 (0.5)
- 7 Ann: But do you **see**: \*hhh uhm
- 8 (0.6)
- 9 Ann: Right there.
- 10 (1.5)
- 11 Ann: Okay.
- 12 Sue: I don't see that one at all.

図6 身体化された調整<sup>xviii</sup>

はじめて考古学の発掘調査に参加して数日しか経っていない若い大学院生のスーが、自分が今作業している土のなかの微妙な色の相違によって古代の柱痕の輪郭を見分けようと、コテで土の上をなぞっている。その輪郭を地層図へ写し取るためである。スーはこの作業を、考古学実地調査の野外教室を指揮する先輩考古学者であるアン(Ann)の指導のもとでおこなっている。スーはコテを使って、土のなかのその輪郭とおぼしき形を、土の上に刻み込もうとしている。そのときアンが、「私なら、そこより**ちょっ**と**だけ**外側に線を引くかな(I would'a put it a *ti::ny* bit out there.)」と言いながら、スーが描いた輪郭の少し外側に、指で軽く別の線を引いていく。こうした、[のちほど]地層図へと転記されることになる正確な輪郭の微調整が可能になるのは、自分が取り組んでいる輪郭の特徴についてのスーの見方が、スーが引いた輪郭線によって公然と示されるからなのである。スーが描いた描線が公然と示されることがひとつの基質となり、アンはその後で少し外側に別の線を引くことでその基質にある種の操作を施すことができるのである。そして、基質に対するこの操作は、まったく新たな異質の行為としてではなく、スーの行為の解釈項(an interpretant)として組織化されるのである。以上の過程は、相互行為の参与者たちがつくり上げている行為や対象物——ここでは柱痕の正確な輪郭線——を微調整するというだけではない。この過程はまた、経験の浅い考古学者が、所属する専門職コミュニティ内の他の成員に自身の活動を信頼に足るものとみなされるために習熟しなければならぬ専門職に宿る技能やものの見方(professional vision)を、非常にきめ細やかに調整することにも寄与するのである。

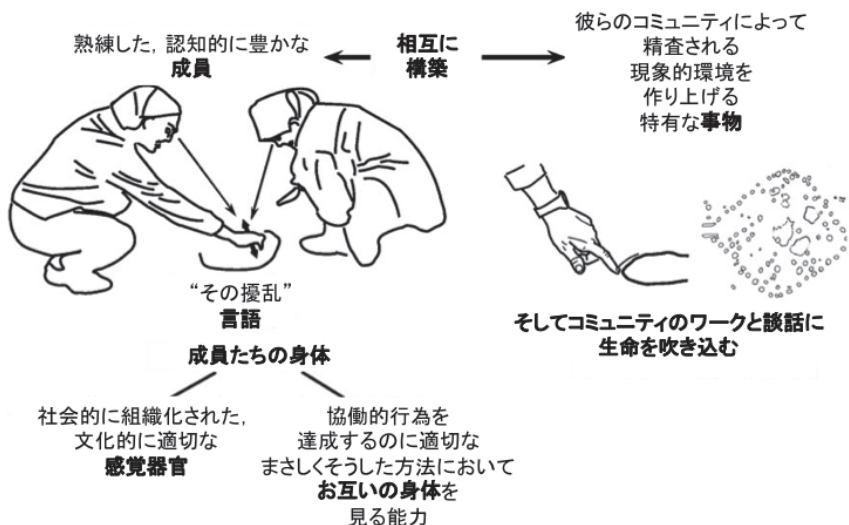


図7 事物，行為体，そしてコミュニティの協働的調整を介した互惠的構造

Goodwin (2010c) でより詳細に述べたように、図7は、ある局所的な知の生態系において、日常的だが重要な帰結を伴う行為が組み立てられるさまを、わかりやすく表したものである。状況づけられた実践を多くの異なる種類の記号論的現象へと結びつける相互精緻化の再帰的過程を通じて、行為者、実践、コミュニティ、そして探求されている世界の理解可能性についての協働的な調整が生ずる。これが可能となるのは、行為というものが多種多様な資源の複雑な結びつきを通じて組み立てられ、それによって異なる立場に置かれた行為者たちが、行為の構成と調整とに同時に参加することが可能となることによってなのである。知の生態系は、あるコミュニティに特有な活動にとって重要な意味をもつ、物事を知る方法を秩序づけ、特定のコミュニティが世界をどのように彼らにとって適切に認識しそれに対して操作を施すのかを記録（たとえば地層図によって）するやり方を組織化するだけではない。知の生態系はまた、ありふれた行為それ自体がなされる只中で、そのコミュニティ固有の知の生態系を、状況に埋め込まれた適切な実践として、新たな成員のもつ熟練した技能のなかに

具現化するためにまさに必要とされる協働的实践を提供するものでもある。地層図を適切に描くために求められる实践を習得することは、同時に、自身の活動のためにそのような地層図を使う考古学者の適切な認知構造をつくり上げることでもあるのである。

## 8 結論

行為は、豊かな意味を蔵した、時間とともに展開していく過程として存在する。個々の行為は、先行する行為の連鎖を通じてつくり上げられた過去から創発されるとともに、過去を利用しつつ出現する。そして、こうした過去の行為の連なりは、高密度の現在の環境——つまり、意味豊かな現在——を現在の参加者に提供し、この現在を構成する多種多様な資源が選択的に解体・再利用・変容されて、未来をどのように秩序づけるかに関する提案となる次の行為が組み立てられるのである。それゆえに人類は、さまざまな資源（たとえば、言語構造、カテゴリー、音調、姿勢、聞き手であることを示す身体的表示、道具、など）を連結することによって行為を組み立てることで、（直前の先行発話から道具・言語・場面の漸進的な構造堆積までの幅をもつ）多種多様な時間尺度の過程によって生み出される、局所的かつ公的な記号論的基質に対する、同時的かつ連鎖的な変容的操作を遂行するのである。行為を組み立てるために、参加者は、次の3つについて詳細に知らなければならない。つまり、第1に、自己と他者が何をおこなっているのか、第2に、自他がどのような知識をもっていることが適切に期待できるのか、第3に、現在進行中の行為の組み立てに資する素材——それが言語構造であれ場面の特徴やそこにある人工物であれ——の関連する諸特徴、の3つである。単一の行為が異なる種類の資源を包含するという人間行為の特徴によって、次のふたつのことが可能となる。1) 連鎖上かわるがわる発言順番を交替する立場にある行為者たちが異種多様な構造を提供して単一の共有行為を生み出す際の、社会組織の特有な形式（たとえば、話し手による発言と聞き手による無言の視覚的表示とが協働して、単一の発話順番とその発話順番における発話とを生み出すこと）、そして、2) 局所的な協働変容域における、多様な行為場面を創り出す濃密度の基質の、時間を通じた累積化と差異

化, である. 今挙げた2点はそれぞれ, ある特定のコミュニティにとっての生活世界を賦活させる活動を遂行するために求められる, 文化的に特有な実践に習熟した有能な成員たちが住まう場でなければならない. 多様な知の生態系の漸進的展開と, その内部での徒弟制的学習を通じて, コミュニティは, 進行中の状況付けられた行為の達成を可能にするまさにその方法においてお互いを理解するために必要な資源を, そのコミュニティの成員たちに与えるのである.

## 謝辞

本稿の草稿に対して以下の人々より戴いた有益かつ洞察に富むコメントに深く感謝する. Eton Churchill, Arnulf Deppermann, Cre Engelke, Candy Goodwin, Anthony Graesch, Timo Kaukomaa, Adam Kendon, Per Linell, Oskar Lindwall, Helen Melandar, Jeremy Kelly, Joe Manson, Numa Markee, Lorenza Mondada, Chase Raymond, Fritjof Sahlström, Monica Smith, Jürgen Streeck, Danjie Su, Akira Takada, Angela Tan, Daniela Veronesi の諸氏と, 二人の匿名の査読者の方々である. また, 本稿は次の方々にも多くを負っている. 考古学実地調査ワークショップの学生 Gail Wagner, チルとご家族, Candy Goodwin が収録したペンシルバニア州の路上で遊んでいた子どもたち, さらに, Elinor Ochs が Sloan 助成により設立した UCLA の家族の日常生活研究センター (CELF) に参加した, 家族生活で生じる実際の出来事の撮影を許可して下さったご家族の方々である.

ご多忙のところを洞察に富んだコメントを戴いたすべての人々たちに対して, 深く心より感謝したい. 本稿にまだまだ問題が残るとすれば, それはひとえに私の責任であるというばかりではなく, 本稿の範囲内において, これらの人びとより戴いたものの豊かさを, 私が十分に探求しえなかったということである.

## 参考文献

- Agha, Asif, 2007, *Language and Social Relations*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bakhtin, Mikhail (Mikhailovich), 1975, *Voprosy literatury i estetiki*, Moskva: Khudozhestvennaia literatura. (=1981, Michael Holquist ed., Caryl Emerson and Michael Holquist, Trans., *The Dialogic Imagination: Four Essays*, Austin: University of Texas Press.)
- Barth-Weingarten, Dagmar, Elisabeth, Reber and Margaret, Selting eds., 2010, *Constructing Meaning*

- Through Prosody in Aphasia*. Amsterdam: John Benjamins.
- Bourdieu, Pierre, 1972, *Esquisse d'une théorie de la pratique précédé de Trois études d'ethnologie kabyle*, Genève: Librairie Droz. (=1977, Richard Nice, Trans., *Outline of a Theory of Practice*, Cambridge: Cambridge University Press.)
- Brasier, Martin D., Matthewman, Richard, McMahon, Sean and Wacey, David, 2011, "Pumice as a remarkable substrate for the origin of life," *Astrobiology* 11 (7): 725-735.
- Cisbra, Gergely and Gergely, György, 2011, "Natural pedagogy as evolutionary adaptation," *Philosophical Transactions of the Royal Society B* 366: 1149-1157.
- Du Bois, John W., forthcoming, "Towards a dialogic syntax," *Cognitive Linguistics* (Special issue on Dialogic Resonance, edited by Rachel Giora and John W. Du Bois).
- Enfield, Nick J., 2009, *The Anatomy of Meaning: Speech, Gesture and Composite Utterances*, Cambridge: Cambridge University Press.
- and Levinson Stephen C. eds., 2006, *Roots of Human Sociality*. London: Berg Press.
- Fitch, W. Tecumseh, 2010, *The Evolution of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goffman, Erving, 1981, "Footing," Erving Goffman ed., *Forms of Talk*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 124-159.
- Goodwin, Charles, 1979, "The interactive construction of a sentence in natural conversation," George Psathas ed., *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, New York: Irvington Publishers, 97-121.
- , 1981, *Conversational Organization: Interaction Between Speakers and Hearers*, New York: Academic Press.
- , 1984, "Notes on story structure and the organization of participation," Max Atkinson and John Heritage eds., *Structures of Social Action*, Cambridge: Cambridge University Press, 225-246.
- , 1994, "Professional vision," *American Anthropologist* 96 (3): 606-633.
- , 1995, "Seeing in depth," *Social Studies of Science* 25: 237-274.
- , 2000, "Action and embodiment within situated human interaction," *Journal of Pragmatics* 32: 1489-1522.
- , 2006, "Human sociality as mutual orientation in a rich interactive environment: multimodal utterances and pointing in aphasia," Nick J. Enfield and Stephen C. Levinson eds., *Roots of human sociality*, London: Berg Press, 96-125.
- , 2007a, "Environmentally coupled gestures," Susan Duncan, Justine Cassell, and Elena Levy eds., *Gesture and the Dynamic Dimension of Language*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 195-212.
- , 2007b, "Interactive footing," Elizabeth Holt and Rebecca Clift eds., *Reporting Talk: Reported Speech in Interaction*, Cambridge: Cambridge University Press, 16-46.
- , 2010a, "Building action in public environments with diverse semiotic resources," *Versus* 112-113: 165-178 (Special Issue "The External Mind: Perspectives on Semiosis, Distribution and

- Situation in Cognition” edited by Rocco Fusaroli, Tommaso Granelli and Claudio Paolucci).
- , 2010b, “Constructing meaning through prosody in aphasia,” Dagmar Barth-Weingarten, Elisabeth Reber and Margaret Selting eds., *Prosody in Interaction*, Amsterdam: John Benjamins, 373-394.
- , 2010c, “Things and their embodied environments,” Lambros Malafouris and Colin Renfrew eds., *The Cognitive Life of Things: Recasting the Boundaries of the Mind*, Cambridge: McDonald Institute Monographs (David Brown Book Co.), 103-120.
- , 2011, “Contextures of action,” Jürgen Streeck, Charles Goodwin and Curtis D. LeBaron eds., *Embodied Interaction: Language and Body in the Material World*, Cambridge: Cambridge University Press, 182-193.
- and Goodwin, Marjorie Harness, 1987a, “Concurrent operations on talk: notes on the interactive organization of assessments,” *IPrA Papers in Pragmatics 1* (1): 1-52.
- and ———, 1992, “Context, activity and participation,” Peter Auer and Aldo di Luzio eds., *The Contextualization of Language*, Amsterdam: John Benjamins, 77-99.
- Goodwin, Marjorie Harness, 1980, “Processes of mutual monitoring implicated in the production of description sequences,” *Sociological Inquiry* 50: 303-317.
- , 1983, “Aggravated correction and disagreement in children’s conversations,” *Journal of Pragmatics* 7: 657-677.
- and Goodwin, Charles, 1987b, “Children’s arguing,” Susan Philips, Susan Steele and Christine Tanz eds., *Language, Gender, and Sex in Comparative Perspective*, Cambridge: Cambridge University Press, 200-248.
- Heath, Christian, Hindmarsh, Jon and Luff, Paul, 2010, *Video in Qualitative Research: Analysing Social Interaction in Everyday Life*. Los Angeles: Sage.
- Heritage, John, 2012. “Epistemics in action; action formation and territories of knowledge,” *Research on Language and Social Interaction*, 45 (1): 1-29.
- Hindmarsh, Jon and Pilnick, Alison, 2007, “Knowing bodies at work: embodiment and ephemeral teamwork in anaesthesia,” *Organization Studies*, 28(9): 1395-1416.
- Husserl, Edmund, 1936, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie: Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie*, *Philosophia* 1: 77-176. (=1954, David Carr, trans, *The Crisis of the European Sciences and Transcendental Phenomenology: An Introduction to Phenomenological Philosophy*, Evanston: Northwestern University Press)
- Hutchins, Edwin, 1995, *Cognition in the Wild*, Cambridge: MIT Press.
- Ingold, Tim, 2007, *Lines: A Brief History*, Oxford: Routledge.
- , 2011, *Being Alive: Essays on Movement, Knowledge and Description*, New York: Routledge.
- Iwasaki, Shimako, 2011, “The multimodal mechanics of collaborative unit construction in Japanese conversation,” Jürgen Streeck, Charles Goodwin and Curt LeBaron eds., *Embodied Interaction: Language and the Body in the Material World*, Cambridge: Cambridge University Press, 106-120.



- Kaukoma, Timo, Peräkylä, Anssi, and Ruusuvoori, Johanna, in press, "Turn-Opening Smiles: Facial Expression Constructing Emotional Transition in Conversation," *Journal of Pragmatics*.
- Kendon, Adam, 2009, "Language's Matrix," *Gesture*, 9: 355-372.
- Knorr-Cetina, Karin, 1999, *Epistemic Cultures: How the Sciences Make Knowledge*, Cambridge: Harvard University Press.
- Latour, Bruno and Woolgar, Steve, 1979, *Laboratory Life: The Social Construction of Scientific Facts*, London: Sage.
- Levinson, Stephen, 2012, "Action formation and ascription," Jack Sidnell and Tanya Stivers, eds., *The Handbook of Conversation Analysis*, West Sussex: Wiley-Blackwell, 103-130.
- Linell, Per, 2009, *Rethinking Language, Mind, and World Dialogically: Interactional and Contextual Theories of Human Sense-Making*. Charlotte: Information Age Publishing.
- Mogk, David, W. and Goodwin, Charles, 2012. "Learning in the field: synthesis of research on thinking & learning in the geosciences," Kim Kastens and Cathryn Manduca eds., *Earth and Mind II: A Synthesis of Research on Thinking & Learning in the Geosciences*, Boulder : The Geological Society of America, 131-163.
- Mondada, Lorenza, 2009, "Emergent focused interactions in public places: a systematic analysis of the multimodal achievement of a common interactional space," *Journal of Pragmatics*, 41(10): 1977-1997.
- Reynolds, Peter, C., 1993, "The complementary theory of language and tool use," Kathleen R. Gibson and Tim Ingold, eds., *Tools, Language and Cognition in Human Evolution*, Cambridge: Cambridge University Press, 407-428.
- Russon, Anne E., 2004, *Orangutans: Wizards of the Rain Forest*, Buffalo : Firefly Books.
- Sacks, Harvey, 1995, *Lectures on Conversation I*, Cambridge: Blackwell.
- , Schegloff, Emanuel A. and Jefferson, Gail, 1974, "A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation," *Language*, 50(4): 696-735.
- Schegloff, Emanuel A. and Sacks, Harvey, 1973, Opening up closings, *Semiotica*, 8(4): 289-327.
- , Jefferson, Gail and Sacks, Harvey, 1977, The preference for self-correction in the organization of repair in conversation, *Language*, 53(2): 361-382.
- Streeck, Jürgen, Goodwin, Charles and LeBaron, Curtis eds., 2011, *Embodied Interaction: Language and the Body in the Material World*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Wittgenstein, Ludwig, 1953, *Philosophische Untersuchungen*, Basil: Blackwell. (=1958, Gertrude Elizabeth Margaret Anscombe, trans., Gertrude Elizabeth Margaret Anscombe and Rush Rhees, eds., *Philosophical Investigations* (2nd edition), Oxford: Blackwell).

### [訳註]

- i 本稿に含まれる図は、日本語訳したものと必要に応じて原文に記載された図のふたつを続けて掲載する。また原文はカラー印刷されていたため、図についての色情報は一部落ちている。図内の色情報が重要である場合、以下、訳注にて示す。

- ii 原文において7行目, 10行目, 13行目, 16行目, 20行目は赤字であり, 8行目, 14行目, 17行目, 19行目は青字で印刷されていた。またこの断片 (b) の16行目および20行目のチャックの発言について, 2点注記しておく。
- (1) この断片は, Goodwin (2010b) で中心的に扱われている。Goodwin (2010b:386) での記述を要約すると次である。この会話がなされている場面はチルの家 (ニュージャージー) である。チャックが住むのはカリフォルニアで, 柑橘系の果物を他の州から運んでくることは法律で禁止されている。したがって, チャックがいうように, グレープフルーツをカリフォルニアにもちこむ (Take some back with us) のは, 違法 (illegal) なのである。加えて, これ以降のトランスクリプトでは笑いがおこり, 上の一連のやりとりはジョークをまじえたやりとりであったことも述べられている。
- (2) また, 原文のトランスクリプトでは, それぞれの発話における「執筆者 (author)」「話者 (speaker)」「責任主体 (principal)」などが区別され色分けされている。16行目の「それを僕らもってけと (take some back with us)」および「ダメだよ それ違法なんだよ」は文字の色が赤くなっている。ほかにも本断片では, 7, 10, 13行目が赤色, 8, 11, 14行目が青色となっている。ここでの赤字は責任主体の行為に必要な言語記号複合体を産出する「執筆者」を, 青字は直前の発話の「責任主体」としての発話であることを示している。
- iii 本論文のタイトルでもある *co-operative* にハイフンが挿入されることによって, 相互行為のなかで, 参加者が操作し合うという点が強調されている。それをふまえここでは「*co-operative*」を「共-操作的」と訳したが, 以降は可読性を考慮し「協働的」と訳す。
- iv 原文では Huey と記載されていたが, 誤植と思われる。
- v Wittgenstein (1953=1997: 91) より訳文引用。
- vi epistemic の訳語については, 認識的などと訳すことも候補に挙げられたが, ここでは, 実際に参加者らが知識をもっているかどうか/認識しているかということよりも, 相互行為のなかで知識主張に関する諸活動がどのようにおこなわれているかということが分析の焦点になっている。この点を平易に示すため「知識主張に関する」という訳語をあてた。以下では「知識に関する」と訳出する。
- vii 原文において (b) の断片において7行目は赤字, 9行目, 14行目は青字で印刷されていた。
- viii Bakhtin (1975=1979: 66) より訳文引用。
- ix 西欧で大人が子供に歌う童謡のひとつ。子ウサギが野ネズミを虐めて妖精に罰せられるストーリー。しばしば両手を上下しながら子ウサギに扮して歌われる。
- x 原文において, 図上の文字は赤字であり, また各々レイヤーの名称は青字で印刷されていた。
- xi Goodwin (1994) に言及している Ingold (2007=2014) の邦訳では地図と訳され, 「地図とは断面図——発掘現場で地面を掘削した断面図——である (ibid: 140)」と説明されている。
- xii アルバート・マンセルが作り出した, マンセル表色系をまとめた色見本帳。
- xiii Wittgenstein (1953=1997: 16) より訳文引用。

- xiv 1970年にアメリカで出版されたHusserl (1936) の英訳本の142ページには、この文と同じ文は記されていない。ただし、WikipediaのLifeworldの項には同じ文が記載されている。(2016年11月15日閲覧。 <https://en.wikipedia.org/wiki/Lifeworld>) .
- xv 原文ではas categories, words sentences, and language gamesと、語と文が接続されているが誤植と思われる。
- xvi 図中、Cのチルの発話および音の高さのグラフと、Dの各部位(石、革紐、木の取っ手)は、原文において青字で印刷されていた。なお、Eは本文中では言及されない。
- xvii ガラバゴス諸島に生息する鳥で、ダーウィンフィンチ類の1種。樹上で生活し、昆虫を主食とする。
- xviii 原文において、アンによる1-2行目の発話は青字で印刷されていた。

# The co-operative, transformative organization of human action and knowledge

*Charles GOODWIN*

*Translated by Takanori KITAMURA, Masafumi SUNAGA,  
Ayami JOH and Ryosaku MAKINO*

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP “16H07260” and “15K17245”

本研究はJSPS科研費 JP “16H07260”「家庭医療におけるケア実践のミクロ社会学」, “15K17245”「[定式化]作業の相互行為分析に基づく介護職員の専門性の確立」の助成を受けた。

なお, また, 翻訳にかかる著作権の取得については, 版元であるエルゼビア社より許諾を得ている。